社会福祉学専攻

24. 科目等履修生（本学大学院科目等履修生規程の抜粋）

1）本学大学院において科目等履修生となることができるものは、本学卒業またはそれと同等以上の学力があると認められた者とする。

2）在学期間は1年とし、履修単位数は10単位以内とする。継続を希望する場合は、大学院社会福祉学専攻教授会の議を経て更新することができる。

3）履修した授業科目については、試験を受けることができる。試験に合格した科目については、単位を与え、「単位取得証明書」（有料）を発行することができる。

1．総合人間学研究科社会福祉学専攻 博士前期課程（2018年度）授業科目表

授業科目の名称		配当年次	単位数			開講状況	担当教員
			必修	選択	自由		
基礎研究科目	キリスト教社会福祉	1・2		2		休講	
	キリスト教社会福祉と倫理学	1・2		2		休講	
	社会福祉援助方法総論	1		2		前期1	福 山 和 女
	社会福祉法政策論	1		2		後期1	金 子 和 夫
	社会福祉調査法Ⅰ	1		2		前期1	山 口 麻 衣
	社会福祉調査法Ⅱ	1		2		後期1	山 口 麻 衣
専門科目	高齢者福祉研究	1・2		2		前期1	市 川 一 宏
	司法福祉研究	1・2		2		前期1	西 原 雄次郎
	社会的弱者の自立支援研究	1・2		2		前期1	福 島 喜代子
	障害者福祉研究	1・2		2		前期1	髙 山 由美子
	児童家庭福祉研究	1・2		2		後期1	加 藤 純
	地域福祉研究＊（隔年開講）	1・2		2		2019	市 川 一 宏
	コミュニティワーク研究	1・2		2		前期1	和 田 敏 明
	精神保健福祉研究	1・2		2		前期1	倉 本 英 彦
	スーパービジョン研究	1・2		2		後期1	福 山 和 女
	家族支援コンサルテーション研究	1・2		2		集中	福 山 和 女
	家族援助技術研究	1・2		1		休講	
	非営利組織における人材育成管理研究	1・2		2		集中	市 川 一 宏
	国際社会福祉研究Ⅰ	1・2		2		前期1	小 高 真 美
	国際社会福祉研究Ⅱ	1・2		2		後期1	原 島 博
	社会福祉における経営管理研究	1・2		2		後期1	和 田 敏 明
専門演習	演習 A（社会福祉の制度・政策）	1・2		4		通年	市川一宏/金子和夫/原島 博/山口麻衣
	演習 B（社会福祉方法と技法）	1・2		4		通年	福島喜代子/髙山由美子
実習	実習	1・2	3	2016年度入学者までは選択必修		通年	髙 山 由 美 子
	実践評価・実践研究	1・2	3			通年	山 口 麻 衣

	日本語論文の書き方（留学生対象）	1	2※			未 定	

※留学生のみ必修　卒業要件単位には含まれない

社会福祉援助方法総論

2単位：前期1コマ	1年
福山　和女	

[到達目標]
実践理論、モデルに基づく対象者理解を促し、統合的実践のための適用力を身につけ、理論と実践を結びつけ、アセスメント能力、評価力などを習得できる。

[履修の条件]
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

[講義概要]
ソーシャルワークの方法論をミクロ・レベルから、マクロ・レベルに分類し、実践への適用の実態を理解し、具体的な技術の特性および限界を把握する。

■授業計画

第1回　実践現場におけるソーシャルワークの現状と課題（講義）
第2回　ソーシャルワークのアセスメント機能とアセスメント項目（講義）
第3回　変化の中の専門職ーミクロ～マクロ（個人、組織、地域）レベルの脈絡（演習と講義）
第4回　ソーシャルワークの新しい方向性の模索（演習と講義）
第5回　相互依存、市民権、社会正義とソーシャルワーク（演習と講義）
第6回　価値・倫理とエンパワメント・ソーシャルワークと倫理的ジレンマ（演習と講義）
第7回　ジェネラリスト・アプローチ（講義）
第8回　システム理論・生態学とソーシャルワーク（演習・講義）
第9回　システム理論と社会構築主義（演習・講義）
第10回　ミクロ・メゾ・マクロ・レベルの変化への対応（演習・講義）
第11回　児童と家族へのソーシャルワーク介入方法（事例検討も含む）（演習）
第12回　高齢者へのソーシャルワーク介入方法（生物・心理・社会的アプローチ）（演習）
第13回　犯罪者へのソーシャルワーク介入方法（認知行動理論の適用）（演習）
第14回　地域を基盤にしたソーシャルワークの介入方法と展開（演習）
第15回　ソーシャルワークの今後の課題（リフレクティング・アプローチを適用）（演習）
第16回　まとめー理論構築の必要性

[成績評価]
試験（30%）、レポート（30%）、小テスト（20%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（0%）

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
テキストや参考文献から、該当する章について予習・復習することを薦める。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
レポートなどでの学習の経過を確認し、適宜に修正を加える。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。研究倫理の遵守、目的と意義妥当性、先行検討計画・遂能力研究倫理の遵守、これらに基づき、研究活動を支援する。

[テキスト]
MINERVA 社会福祉士養成テキストブック4『ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ』ミネルヴァ書房（2010）2,600円+税

[参考文献]
『統合的短期型ソーシャルワーク』金剛出版（2014）
Doel,M. , 他（2010）Contemporary Field Social Work：Integrating Field and Classroom Experience、
Sage Publication Inc. 5,816円

[備考]
出席日数、学期中のレポートの提出、試験などで総合的に評価する。
参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する

社会福祉法政策論

2単位：後期1コマ	1年
金子　和夫	

[到達目標]
高度な専門職として相談援助に必要な福祉サービス、社会保障制度にかかる法的構造を理解し、利用者の権利擁護と権利侵害への対応について説明できるようにする。また、研究者を目指して博士後期課程に進むに当たって必要な法政策に関する知識、研究方法を修得する。

[履修の条件]
特になし

[講義概要]
本講義は、現代社会保障制度・社会福祉サービスにかかる法政策，とりわけ、権利擁護制度を検証し、その創設・展開、意義、役割、問題点、課題などについて講義するとともに、それに関連する法律文献、判例、白書などを読み、講義内容について質疑応答を行い、その内容を深める。
授業の展開は、基本的には、担当教員がわが国の社会保障・社会福祉法政策の展開、とりわけ、社会保険制度や権利擁護制度の動向・課題などについて、文献や統計資料などから制度内容や実態を理解する。その後、事例研究や判例研究を行うことによりさらに理解を深め、各受講者は利用者への権利侵害の対応や意思決定の支援など個別の法課題について、分析・検討・発表を行うこととする。

■授業計画

第1回　「少子・高齢社会」「人口減少社会」の社会保障・社会福祉法政策への影響（講義と演習）
第2回　社会保障・社会福祉法政策の展開（講義と演習）
第3回　権利擁護制度の動向（講義と演習）
第4回　憲法等に見る権利論の動向（講義と演習）
第5回　権利能力・行為能力（講義と演習）
第6回　成年後見制度の内容と実際（講義と演習）
第7回　契約と消費者保護制度（講義と演習）
第8回　損害賠償制度（講義と演習）
第9回　夫婦関係と DV 防止法（講義と演習）
第10回　親子関係と児童虐待防止法（講義と演習）
第11回　扶養と高齢者虐待防止法（講義と演習）
第12回　行政処分と不服申し立て（講義と演習）
第13回　社会保障・社会保険関係の判例研究（講義と演習）
第14回　社会福祉サービス関係の判例研究（講義と演習）
第15回　成年後見関係の判例研究（講義と演習）
第16回　レポート提出

［成績評価］
試験（0%）、レポート（80%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（20%）

［成績評価（備考）］
成績評価の「その他」は、質疑応答の状況により評価する。
習得度は、毎回の授業の中で、文献・判例などにより制度や事例検討の理解力を確認し評価する。最終レポートは、学習した理論・制度・判例などの知識が実践において活かせるか、また、問題の発掘と解決策の検討などを確認のうえ評価する。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
社会保障・社会福祉法政策に関しては、毎日のように新聞や TV 等で取り上げられている。それを自分の問題関心の範囲内で収集するように心がける。また、授業や報告での不明・疑問等については、各自で文献や資料にあたり、受講者間で議論し、明らかにしようとする姿勢が大切である。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
授業中の質問については、その都度口頭および資料等によりフィードバックしていく。また、課題レポートににについては、次の授業の際、または授業終了後にメール等でコメントを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
2. 全人的なヒューマンケアに必要な高度な専門性、および、3. 総合的・実践的な学習能力に該当する。本科目を学ぶことにより、福祉の高度な専門職に必要とされる価値、知識、技術を身につけ、人権と生活を守り、人間性豊かな人生が送ることができるよう援助できる、また、ものごとの本質を把握し、問題点の発見、分析、事態の改善、改善策の提言・実行等ができるようになる。

［テキスト］
必要に応じて資料を配布する。

［参考文献］
『厚生労働白書』『国民生活白書』『高齢社会白書』等の白書
『社会保障統計年報』等の統計資料
『保険と年金の動向』『国民の福祉と介護の動向』等の定期刊行物
『ジュリスト』『法律時報』『社会保障判例百選』『民法判例百選』『家族法判例百選』等の法律雑誌
『社会保障法学会誌』『社会福祉学会誌』等の学会誌
『成年後見』等の専門雑誌
その他社会保障・社会福祉法政策、権利擁護関係の文献は多数あるので、講義に際して紹介する。

社会福祉調査法Ⅰ

2単位：前期1コマ	1年
山口　麻衣	

［到達目標］
①多変量解析の基礎的な知識や分析方法を学ぶ、分析手法スキルを高める。
②質的調査の多様な方法や評価研究について学び、ソーシャルワーク実践に役立つ調査研究方法について理解を深める。
③実践の効果測定、実践研究、サービス評価の考え方と方法について、理解し、説明できる。

［履修の条件］
本講義は、ⅠとⅡに分かれているが、実際は通年科目と同様なので、受講者はⅠとⅡの両方を履修していただきたい。

［講義概要］
社会福祉調査の方法や分析に関する知識を高め、社会福祉調査を理解・分析し、実際に調査を担えるソーシャルワーク専門職となるための基礎を養うことを目的とする。社会福祉調査法について体系的に学び、社会福祉調査を行う上での量的調査と質的調査の活用の可能性と限界を理解する。統計解析ソフト（SPSS）を用いて分析を行うことにより、多変量解析の方法を学ぶ。質的調査の多様な方法や質的調査と質的調査のミックス法についても理解する。さらに、ソーシャルワーク実践に役立つ実践の効果測定、実践研究、ニーズ分析、評価研究、サービス評価、プログラム評価の考え方と方法を学ぶ。

■授業計画

第1回　社会福祉調査の概要　調査方法（量的調査・質的調査）と研究倫理（講義）
第2回　エビデンス・ベースド・プラクティス（EBP）と社会福祉調査の関連（講義）
第3回　サービスの質の評価とプログラム評価の概要（講義）
第4回　量的調査における仮説構築と検証，統計的検定・サンプリング（講義）
第5回　量的調査における測定、変数と尺度，質問紙作成，統計ソフトの活用方法と実際（講義・演習）
第6回　社会福祉調査における質的調査法の概要（講義）
第7回　一変数の分析（単純集計、記述統計）（講義・演習）
第8回　SW における評価研究，質的調査法の様々なアプローチ（1）グランデッド・セオリー・アプローチ（講義・演習）

第9回　二変数の分析（クロス集計　$\chi 2$検定，平均の差ｔ検定，一元配置分散分析　Ｆ検定）（講義・演習）
第10回　質的調査法の様々なアプローチ（2）ライフストーリー法（講義・演習）
第11回　二変数の分析（相関分析・単回帰分析）（講義・演習）
第12回　質的調査法の様々なアプローチ（3）エスノグラフィー・内容分析他（講義・演習）
第13回　実践効果測定、実践研究（講義・演習）
第14回　サービス評価、プログラム評価、ニーズ分析（講義・演習）
第15回　EBPと社会福祉調査−実践に役立つ社会福祉調査のために（まとめ）（講義・演習）
第16回　レポート提出

［成績評価］
試験（0％）、レポート（50％）、小テスト（0％）、課題提出（0％）、その他の評価方法（50％）

［成績評価（備考）］
レポートは調査研究計画・データ分析・研究課題を学期末にまとめる。その他の評価はリーディング課題/担当分の報告・レジメ提出、毎回のフィードバック、授業の積極的な参加。面接授業の出席100％。やむを得ず欠席の場合はレポートで代替できる（3回まで）。30分を過ぎた遅刻は欠席（遅刻3回で欠席1回）とする。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
リーディング課題は全員、事前に読む。テキストの予習・復習、統計分析の自習や統計個別指導の活用を薦める。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
リアクションペーパーに対するフィードバックを次回の講義において行う。課題レポートについては、レポート返却時に個別にコメントを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備える」に該当する。この科目を履修することで、研究するうえで不可欠な社会福祉調査方法に関する、高度な専門的知識や技術を身につけることとなる。

［テキスト］
浦上昌則・脇田貴文（2008）『心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方』東京図書. 2,940円　.
Flick,　Uwe.（2007=2011），小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳　『質的研究入門−＜人間科学＞のための方法論』新版　春秋社

［参考文献］
村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士編（2007）『SPSSによる多変量解析』オーム社. 2,940円、笠原千絵・永田祐編著（2013）『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』春秋社，2625円、その他の参考文献は授業で紹介する。

［備考］
担当部分のレジメ作成・発表を求める。

社会福祉調査法Ⅱ

2単位：後期1コマ	1年
山口　麻衣	

［到達目標］
①多変量解析の基礎的な知識や分析方法を学ぶ、分析手法スキルを高める。
②質的調査の多様な方法や評価研究について学び、ソーシャルワーク実践に役立つ調査研究方法について理解を深める。
③実践の効果測定、実践研究、サービス評価の考え方と方法について、理解し、説明できる。

［履修の条件］
本講義は、ⅠとⅡに分かれているが、実際は通年科目と同様なので、受講者はⅠとⅡの両方を履修していただきたい。

［講義概要］
社会福祉調査の方法や分析に関する知識を高め、社会福祉調査を理解・分析し、実際に調査を担えるソーシャルワーク専門職となるための基礎を養うことを目的とする。社会福祉調査法について体系的に学び、社会福祉調査を行う上での量的調査と質的調査の活用の可能性と限界を理解する。統計解析ソフト（SPSS）を用いて分析を行うことにより、多変量解析の方法を学ぶ。
質的調査の多様な方法や質的調査と質的調査のミックス法についても理解する。さらに、ソーシャルワーク実践に役立つ実践の効果測定、実践研究、ニーズ分析、評価研究、サービス評価、プログラム評価の考え方と方法を学ぶ。

■授業計画
第1回　多変量解析方法の概要、多変量解析の実際と課題、重回帰分析（講義・演習）
第2回　社会福祉実践と調査研究（1）：実践効果・実践評価・ニーズ分析（講義・演習）
第3回　社会福祉実践と調査研究（2）：集団比較実験計画法、単一事例実験計画法（講義・演習）
第4回　質的研究法の研究動向・質的調査の方法（1）多様な方法の概要（事例分析）　（講義）
第5回　因子分析（講義・演習）
第6回　社会福祉実践と調査研究（3）：評価研究・サービスの質の評価（講義・演習）
第7回　分散共分散分析（講義・演習）
第8回　質的調査の方法（2）グランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）とライフストーリー法（講義）
第9回　ロジスティック回帰分析（講義・演習）
第10回　社会福祉実践と調査研究（4）：評価研究・プログラム評価（講義・演習）
第11回　クラスター分析、テキストマイニング（講義・演習）
第12回　質的調査の方法（3）内容分析・フィールドワーク、エスノグラフィ（講義・演習）
第13回　多変量解析まとめ（講義・演習）

第14回　社会福祉実践と調査研究(5)：アクションリサーチ(講義・演習)
第15回　まとめ、実践評価、サービスの質の評価・プログラム評価、システマティック・レビュー(講義・演習)
第16回　レポート提出

[成績評価]
試験(0%)、レポート(50%)、小テスト(0%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(50%)

[成績評価(備考)]
レポートは調査研究計画・データ分析・研究課題を学期末にまとめる。その他の評価はリーディング課題/担当分の報告・レジメ提出、毎回のフィードバック、授業の積極的な参加。面接授業の出席100%。やむを得ず欠席の場合はレポートで代替できる(3回まで)。30分を過ぎた遅刻は欠席(遅刻3回で欠席1回)とする。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
リーディング課題は全員、事前に読む。テキストの予習・復習、統計分析の自習や統計個別指導の活用を薦める。本科目では各授業回に4時間の準備学習(予習・復習等)を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
リアクションペーパーに対するフィードバックを次回の講義において行う。課題レポートについては、レポート返却時に個別にコメントを行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備える」に該当する。この科目を履修することで、研究するうえで不可欠な社会福祉調査方法に関する、高度な専門的知識や技術を身につけることとなる。

[テキスト]
浦上昌則・脇田貴文(2008)『心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方』東京図書. 2,940円

[参考文献]
村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士編(2007)『SPSSによる多変量解析』オーム社. 2,940円。小潮真司(2011)『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析-因子分析・共分散構造分析まで-(第二版)』, 東京図書　,　Flick,　Uwe. (2007=2011), 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳　『質的研究入門−<人間科学>のための方法論』新版　春秋社　その他の参考文献は授業で紹介する。

[備考]
課題として、担当部分のレジメ作成・発表を求める。

高齢者福祉研究

2単位：前期1コマ	1・2年
市川　一宏	

[到達目標]
疾病や認知症、うつ病に関する基礎理論、高齢者を取り巻く生活課題を把握する調査理論、社会福祉士が活用する社会福祉制度の成立要因、現状と課題を分析する福祉政策理論、高齢者へのソーシャルワークの知識、方法を学び、実際の現場に適用し、その検証を行い、社会福祉士として実践の水準の向上を図る。そのため、事例研究や、受講生の職場等を通した課題を報告させ、スーパービジョンを行い、個別支援の他、職種連携及び地域福祉の増進を行うことができる能力を養成する。習得度は、(1)文献・事例に対する理解度、(2)最終レポートの内容により判断する。疾病や認知症、うつ病に関する基礎理論、高齢者を取り巻く生活課題を把握する調査理論、社会福祉士が活用する社会福祉制度の成立要因、現状と課題を分析する福祉政策理論、高齢者へのソーシャルワークの知識、について習熟度を確認する。

[履修の条件]
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

[講義概要]
高齢者がもつ医療、福祉、生活環境等の理論的学習とともに、高齢者および家族介護者支援に関する基礎理論、ソーシャルワーク理論等に基づくアプローチの方法等を研究し、社会福祉士としてより高度の理論、実践知識、技術を習得できるようにする。

■授業計画
第1回　高齢者福祉政策の分析視角(講義)
第2回　高齢者福祉の歴史、高齢者福祉施設の史的展開と現在の機能(講義)
第3回　高齢者問題の所在(講義)
第4回　老親を扶養する家族が直面する課題(講義)
第5回　地域における施設の機能(講義)
第6回　入所施設における処遇(講義)
第7回　在宅を支援する仕組みの検討(社会資源と地域ネットワーク)(講義)
第8回　高齢者の権利保障と援助の専門性(講義)
第9回　高齢者福祉計画の検証とまちづくり(講義)
第10回　ケアマネジメント、ケア計画の作成(演習・事例検討)
第11回　ケア会議の実践(演習・事例検討)
第12回　在宅高齢者の虐待、孤立予防(演習・事例検討)
第13回　施設の社会化を目指す実践(事例検討)
第14回　高齢者保健福祉計画の策定の検証(演習・事例検討)
第15回　総括
第16回　レポート

[成績評価]
試験(0%)、レポート(70%)、小テスト(0%)、課題提出(20%)、その他の評価方法(10%)

[成績評価（備考）]
面接授業の出席100％。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
予習に関しては、年間のシラバスにあるテーマに関して授業ごとにレポートを分担する。分担したレポートだけでなく、関係文献もしくは自分が関わる実践現場を通して学習しておくこと。復習に関しては、講義で提示する課題を調べておくこと。各授業回に事前学習2時間、事後学習2時間が必要。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
レポート・課題に関しては、完成前の構想もしくは作成段階で報告を義務づけ、コメントを行う。その上で、レポート・課題を完成させる。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

[テキスト]
各テーマに即したレジメを配布する

[参考文献]
各テーマに即したレジメと資料を紹介する。

司法福祉研究

2単位：前期1コマ	1・2年
西原　雄次郎	

[到達目標]
①司法福祉の歴史と現状の全体像を理解する。
②成人・少年の刑事事件への福祉的関与の現状を理解する。
③更生保護制度の概要と司法福祉の関係を理解する。
④民事事件・家事事件への福祉的関与の現状を理解する。
⑤高齢者・障害者による犯罪とこれへの対応におけるソーシャルワークの貢献と課題を理解する。

[履修の条件]
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生
社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

[講義概要]
三権の一つである司法制度の全体像を理解し、その中で模索されてきた福祉的取り組みの歴史と現在の諸課題を、主として文献と事例を通して展望する。
また、ソーシャルワーカーとしてどの様にこれらの課題に取り組むべきなのか、具体的な多くの事例を用いて学習する。

■授業計画
第1回　司法福祉とは1（講義）
　　・・規範的解決と実態歴解決
第2回　司法福祉とは2（講義）
　　・・司法と福祉の連携の必要性
第3回　司法福祉とは3（講義）
　　・・司法と福祉の連携の実際
第4回　司法福祉の歴史的概観1（講義）
　　・・先駆者による実践例から学ぶ1
第5回　司法福祉の歴史的概観2（講義）
　　・・先駆者による実践例から学ぶ2
第6回　刑事司法と社会福祉1（講義）
　　・・捜査過程と福祉的配慮（入口支援）
第7回　刑事司法と社会福祉2（講義）
　　・・裁判過程と福祉的配慮（入口支援）
第8回　刑事司法と社会福祉3（講義）
　　・・刑務所・少年院等の刑事施設における福祉的実践
第9回　刑事司法と社会福祉4（講義）
　　・・更生保護と福祉的視点1（出口支援）

第10回　刑事司法と社会福祉5（講義・演習）
　　・・更生保護と福祉的視点2（出口支援）
　　累犯障がい者支援と更生保護
第11回　刑事司法と社会福祉6（講義・演習）
　　・・更生保護と福祉的視点3（出口支援）
　　累犯高齢者支援と更生保護
第12回　犯罪予防、再犯防止に関する取組と課題（講義・演習）
第13回　民事・家事司法と社会福祉1（講義・演習）
　　・・家事審判・調停事件と福祉的視点1
第14回　民事・家事司法と社会福祉2（講義・演習）
　　・・家事審判・調停事件と福祉的視点2
第15回　総括と司法福祉の課題（講義・演習）
第16回　課題提出

[成績評価]
試験（0％）、レポート（70％）、小テスト（0％）、課題提出（0％）、その他の評価方法（30％）

[成績評価（備考）]
①授業ごとに、その授業で学んだこと・考えたことを、メールで担当者に送信する。その内容の評価を30％とする。
②最終レポートの評価を70％とする。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
①認定社会福祉士養成講座として必要な諸条件を別途提示する。
②各自の専門職としての知識に大きな差があると思われるが、直接この分野と関わって来なかった受講者は特に事前・事後学習に努めてもらいたい。
③想定されている予習・復習の時間は授業ごとに4時間であり、

合計60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
①各授業毎に学んだこと、考えたことを担当者にメールにて送信する。
②最終課題は最終授業時に提示する。
③授業ごとに提出されたメールに対するフィードバックは、次回授業時に応答する。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、本学のディプロマ・ポリシーとして示されている「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に付ける」という点の一翼を担うものである。

［テキスト］
毎回担当者が作成・配布する資料を基に授業を展開する。

［参考文献］
①『犯罪白書』『犯罪被害者白書』『司法統計年報』等の各年版、及び、法務省、厚生労働省、最高裁判所等のホームページに掲載される最新情報をその都度活用する。
②新聞等に掲載される司法福祉に関わる記事も参考にする。

社会的弱者の自立支援研究

2単位：前期1コマ	1・2年
福島　喜代子	

［到達目標］
社会的弱者が、格差社会の中で、貧困や低所得に陥る背景と実態を把握する。そのような中、ソーシャルワーカーが、制度等を活用し、一人ひとりのスキルを向上させ、エンパワメントしながらソーシャルワークを展開できるようにする。

［履修の条件］
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生が履修できる。＊認定社会福祉士の認証研修の分野共通の科目である。

［講義概要］
社会的弱者が、貧困や低所得に陥る状況を理解し、その固定化に対する支援ができるようにする。社会的弱者のアセスメントと支援の仕方について考察していく。

■授業計画

第1回　オリエンテーション
　　貧困・低所得者の現状（文献をもとに討議）
第2回　労働問題、格差社会、相対的貧困と関連法（文献をもとに討議）
第3回　社会的弱者の総合的・包括的アセスメント（講義と演習）
第4回　社会的弱者の総合的・包括的な支援計画（講義と演習）
第5回　社会的弱者の支援の方法1（価値観の異なる人と信頼関係を構築する支援についての演習）
第6回　社会的弱者の支援の方法2（認知や行動に働きかける支援についての演習）
第7回　社会的弱者の支援の方法3（グループで人と関わり、相互作用システムを活用する支援についての演習）
第8回　社会的弱者の支援の方法4（社会資源や制度の活用についての演習）
第9回　社会的弱者とジェネラリスト・ソーシャルワーク（事例研究）
第10回　社会的弱者の福祉利用援助と日常的金銭管理支援（事例研究）
第11回　精神疾患を有する社会的弱者とリカバリーと病気の自己管理支援（事例研究）
第12回　母子・児童の自立支援（事例研究）
第13回　障害者の就労支援（事例研究）
第14回　事例の評価
第15回　事例のフォローアップ
第16回　－

［成績評価］
試験（0％）、レポート（30％）、小テスト（0％）、課題提出（30％）、その他の評価方法（40％）

［成績評価（備考）］
授業に出席をして、演習に積極的に参加することを求める。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
各本科目では、各授業回に事前学習2時間、事後学習2時間が必要となる。合計15回の授業で60時間必要となる。
回毎に、定められたテキストの該当ページを読んで予習をする。また、各自担当となった回については、課題をもとに発表をする。そして、最後にレポートを課す。

［試験・レポート等のフィードバック］
レポートについては、発表時にコメントを行う。発表時のコメントをもとに最終レポートの提出を求める。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

［テキスト］
・福島喜代子（2013）『自殺危機にある人への初期介入の実際』明石書店

［参考文献］
・岩田正美（2008）『社会的排除－参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣
・阿部彩（2014）『子どもの貧困Ⅱ－解決策を考える』岩波新書
・奥田知志・稲月正ほか（2014）『生活困窮者への伴走型支援』明石書店

・R・トーズランド(2003)『グループワーク入門−あらゆる場で役に立つアイデアを活用法』中央法規出版
適宜紹介する

障害者福祉研究

2単位：前期1コマ	1・2年
髙山　由美子	

[到達目標]
①障害者福祉の歴史的経緯を学習し、権利擁護の視点に基づいて、現状における課題とこれからの支援のあり方を分析する力を身に付ける。
②障害者支援の実践に必要なソーシャルワークの諸理論、中でもジェネラリスト・ソーシャルワークの視点をベースにしつつ、ICF、ケアマネジメント、エンパワメントの考え方等々を活用して、事例検討が行えるようになる。
③これらの学習を通して、自身の実践の省察、評価を行い、実践課題を明確にし、理論に基づく具体的な支援方法を修得する。
④各当事者の疾病・障害を含む全体像と、生活上の困難について把握出来るようになる。
⑤各当事者への支援の展開を実際的に検討し、実践に生かせるようになる。

[履修の条件]
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生であること、または社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生であること。

[講義概要]
①障害者の地域生活支援や社会参加支援に焦点を当てて、転換期にある障害者福祉の諸課題を検討し、今後のあるべき方向をさぐるべく各自が自身の意見を形成することを目標とする。
②障害者支援に必要な、諸理論に基づく具体的なアプローチの方法を学び、実践に活用できるようにする。
③受講者各自が関わる実践現場での各当事者を理解するための知識、理論、支援方法について事例検討を通して学習する。
④個々の当事者に対する理解を深め、有効な支援を行えるようになることを目標とする。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
　　授業のねらい　障害福祉の理念と歴史
第2回　障害の診断と障害受容(講義・演習)
第3回　障害児教育と福祉的支援の展開(講義・演習)
第4回　障害者の雇用と就労支援(講義・演習)
第5回　障害者計画・障害福祉計画と地域生活支援(講義・演習)
第6回　障害者の権利擁護と地域生活支援(講義・演習)
第7回　障害者の自立生活支援(講義・演習)
第8回　障害者の理解と支援の展開における留意点(講義)
第9回　身体障害者の理解と支援展開(講義・演習)
第10回　知的障害者の理解と支援展開(講義・演習)
第11回　精神障害者の理解と支援展開(講義・演習)
第12回　発達障害者の理解と支援展開(講義・演習)
第13回　触法障害者の理解と支援展開(講義・演習)
第14回　高齢障害者の理解と支援展開(講義・演習)
第15回　まとめ(講義・演習)
第16回　−

[成績評価]
試験(0%)、レポート(80%)、小テスト(0%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(20%)

[成績評価(備考)]
面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは2回までとする。
やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
本科目では合計15回の授業のために、計60時間の事前学習、事後学習が必要となる。授業時に出される課題に取り組んだ上で、次の授業に出席することを求める。

[試験・レポート等のフィードバック]
授業時の発表等に対してフィードバックを行う。また毎回の授業で提出するリアクションペーパーについては必要に応じて、以降の授業でフィードバックを行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識を身につける」「高度な専門的知識や技術を備える」に該当する。この科目を履修することにより、社会福祉分野における広い学識を身につけ、ソーシャルワーク専門職としての高度な専門知識と技術を備えることとなる。

[テキスト]
参考文献を利用しつつ、主として授業時に配布する資料を用いて行う。

[参考文献]
1. 全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化…当事者からの福祉論』、現代書館
2. 杉本　章著『障害者はどう生きてきたか…戦前・戦後障害者運動史(増補改訂版)』現代書館
3. 田中恵美子著『障害者の「自立生活」と生活の資源…多様で個別なその世界』生活書院
4. 佐藤久夫・小澤温『障害者福祉の世界』有斐閣　他

児童家庭福祉研究

2単位：後期1コマ	1・2年
加藤　純	

[到達目標]
児童家庭分野の理論・支援アプローチの成り立ちと主要概念について説明する力を養う。
児童家庭分野の理論・アプローチを自身の実践に結び付け省察・評価する力を養い、実践の改善課題について説明できるようになる。

子どもおよび子育てをする家族が直面する多様な課題を捉え、アセスメントし、支援計画を立てられるようになる。

[履修の条件]
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。
社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生。

[講義概要]
子どもと家族の支援に関して、基礎理論およびソーシャルワーク理論に基づく支援アプローチを学び、実践に活用できるようにする。
児童家庭福祉の対象者を理解するための理論と支援方法について学ぶ。

■授業計画

第1回　子どもや家族のニーズの把握と理解、子育て問題発生機序（演習・講義）
第2回　児童虐待問題の社会的構築・児童虐待概念の成立（講義・演習）
第3回　被虐待児童における虐待の法的定義と実践での判断（講義・演習）
第4回　虐待対応の法制度（講義）
第5回　家族システム論の基礎, 家族療法系譜（講義）
第6回　児童領域における家族療法事例の検討（演習）
第7回　児童相談所の対応事例（演習）
第8回　リスク理論（講義）
第9回　リスク・アセスメント表の作成（演習）
第10回　被虐待児への生活支援の意義と方法（講義・演習）
第11回　児童養護施設での家族支援（講義・演習）
第12回　家族再統合のための地域資源（講義・演習）
第13回　プログラム評価の基礎とロジックモデルの作成方法（講義・演習）
第14回　不登校・いじめにおける生活問題としての理解（講義・演習）
第15回　不登校・いじめに対するソーシャルワーカーとしての支援方法（講義）
第16回　-

[成績評価]
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（50%）

[成績評価（備考）]
授業には全て出席すること。最終レポートを提出し合格すること。やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。遅刻3回で欠席1回とみなす。30分以上の遅刻・早退は欠席とする。同一コマで遅刻と早退が合計30分以上の場合欠席とする。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
授業中に事例についてグループディスカッションをするので、事前に事例を読むこと。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）が必要です。合計15回の授業で60時間となります。

[試験・レポート等のフィードバック]
期末レポートはメールボックスを通して返却します。メールにより提出された場合は、メールの返信によりコメントします。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

[テキスト]
授業中に資料を配布。授業では、下記の文献の内容を紹介する。
上野加代子・野村知二（2003）『〈児童虐待〉の構築』世界思想社教学社
中河伸俊他（2001）『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版
衣斐哲臣（1997）「体罰習慣がある家族に対する助言指導と保母・教師へのコンサルテーション」『家族療法研究』14巻2号
M. Durrant（1991）" Residential Treatment" W. W. Norton.

[参考文献]
Berg, I. K.（磯貝希久子監訳, 1997）『家族支援ハンドブック』金剛出版
A. Turnell, & S. Edwards（白木孝二他訳, 2004）『安全のサインを求めて』金剛出版

[備考]
やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。
評価のポイントは、児童家庭分野の理論と支援アプローチの概念や技法を理解できたか、および各自の実践の省察・改善に活かす道筋がイメージできたか、児童家庭分野の対象者を理解するための理論と支援方法について理解できたか、および各自の実践におけるアセスメントや支援計画立案に活かすイメージができたかである。習得度は、(1)授業における討議や事例検討への参加状況、(2)最終レポートの内容により判断する。

コミュニティワーク研究

2単位：前期1コマ	1・2年
和田　敏明	

[到達目標]
所属組織が所在する地域の福祉システムを把握し、地域の生活課題、福祉ニーズを踏まえて、地域の自組織の役割が説明でき、地域の課題やニーズについてのアセスメントに基づき地域介入の目標と方法を選べる力量を向上させる。

[履修の条件]
・面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。

・やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。同一コマで遅刻と早退がある場合は合計時間を30分以内とする。
・最終レポートを提出し合格すること。

[講義概要]
コミュニティワークの概念、目的、方法、技術、コミュニティワーカー役割と類型、社会計画アプローチ、スペシャリスト・コミュニティワーク等を研究し、所属組織が所在する自治体における組織間連携の仕組み、社会資源の実態、福祉政策の形成過程、福祉計画を把握し、地域のおける所属組織の役割、地域の生活課題、福祉ニーズを発見する力量を養成することを目的とする。

■授業計画
第1回　地域組織化の理論1(講義)
第2回　地域組織化の理論2(講義)
第3回　コミュニテイ・オーガニゼション統合化説の歴史的意義(講義と演習)
第4回　M、G、ロスの思想と理論(講義と演習)
第5回　コミュニティ・オーガニゼーションの概念(講義と演習)
第6回　コミュニティ・オーガニゼーションとコミュニティ(講義と演習)
第7回　民主主義とコミュニティ・オーガニゼーションの役割(講義と演習)
第8回　コミュニティオ・ーガニゼーションと住民の主体形成(講義と演習)
第9回　コミュニティ・オーガニゼーションの原則(講義と演習)
第10回　コミュニティ・オーガニゼーションの志向性とプロセスモデル(講義と演習)
第11回　支援関係とコミュニティワーカーの役割(講義と演習)
第12回　コミュニティオーガニゼーションと社会福祉協議会基本要綱(講義と演習)
第13回　コミュニティワーク(講義と演習)
第14回　コミュニティソーシャルワーク(講義と演習)
第15回　地域共生社会推進とコミュニティワーカーの役割と実践(講義と演習)
第16回　地域をベースにした社会福祉展開におけるコミュニティワークの役割と課題　レポート提出

[成績評価]
試験(0%)、レポート(50%)、小テスト(0%)、課題提出(50%)、その他の評価方法(0%)

[成績評価(備考)]
習得度は、(1)講義・文献・演習における理解度、(2)課題提出の内容により判断する。課題提出のレポートにおいてコミュニティワークの理論概念を説明でき、コミュニティワークの理論を踏まえて自身の所属組織の存在する地域社会の分析、組織の役割を評価説明でき地域介入の目標と方法等が説明できるか評価する

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
授業ごとに教科書の章を割り当てるので、読み進めること。
自分が経験した事例を発表しまとめること。
発表後、討議や教員の講評、教科書に書かれていることをもとに、事例の考察を深め、まとめること。本科目では各授業回に4時間の準備学習(予習・復習等)を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
課題レポートについては授業の際に議論やコメントを行う

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に着けている」に該当する。この科目を履修することで社会福祉分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に着けることとなる。

[テキスト]
「コミュニティワーク」アラントウエルブトウリーズ　杉本敏夫訳　久美株式会社「コミュニティオーガニゼーション統合化説」山口稔　関東学院大学出版会「コミュニティソーシャルワーク」R. ハドレイ　川島書店「地域福祉コーディネーターの役割と実践」東京都社会福祉協議会

[参考文献]
授業にて提示予定

精神保健福祉研究

2単位：前期1コマ	1・2年
倉本　英彦	

[到達目標]
福祉職・心理職・医療職は協働することが多く、共通の専門的知識を有することが必要である。そのもっとも基礎となる知識体系である精神医学を学び、身体、精神、社会という側面からの多次元的なアプローチができるようにする。

[履修の条件]
社会福祉学専攻生・臨床心理学専攻生で、履修登録を行った者。

[講義概要]
精神医学とは何だろうか?臨床心理学や社会福祉学との関連から位置付けてみよう。精神医学の方法論は?生物、精神、心理、社会的次元から探ってみよう。精神科医療の現状とは?日本と世界の精神科医療の実際を知ろう。精神障害とは?異常と正常、病気と健康、精神の病とは何か。精神障害の歴史や概念、そして原因、症状、疫学、診断、治療、予後、リハビリテーションなど、個々の疾患の特徴を体系的に学ぼう。授業形態については、基本的に講義形式になるが、わかりやすいようにDVD映像を使用したり、トピックに沿った発表形式で行うことにする。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
　　精神医学入門
第2回　異常と正常、病気と健康、素質と環境

第3回　精神症状、状態像、症候群、精神障害の体系、精神疾患概念の歴史
第4回　心因によるもの(1)　心身症
第5回　心因によるもの(2)　神経症とストレス関連障害
第6回　心因によるもの(3)　睡眠・摂食・性関連障害
第7回　内因によるもの(1)　統合失調症
第8回　内因によるもの(2)　気分障害
第9回　器質因によるもの(1)　脳の急性障害
第10回　器質因によるもの(2)　脳の慢性障害
第11回　器質因によるもの(3)　アルコール・薬物関連障害
第12回　児童・青年期精神医学(1)　情緒と行動の問題
第13回　児童・青年期精神医学(2)　発達障害
第14回　性格のかたより
第15回　精神保健福祉法　司法精神医学
第16回　まとめ、試験あるいはレポート

[成績評価]
試験(0%)、レポート(40%)、小テスト(40%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(20%)

[成績評価(備考)]
専門職に就くものとして授業に対する適切で積極的な取り組みも考慮する

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
予習：シラバスに沿った箇所の教科書や文献をあらかじめ読んでおく
復習：講義内容や発表をよく振り返り、ノートにまとめる
本科目では各授業回に4時間(予習・復習等)を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
講義内小テストの解答・解説は、テストの実施日あるいは次回に行う。
発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目を履修することにより、ディプロマポリシーにある、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることができる。

[テキスト]
山下格著『精神医学ハンドブック―医学・保健・福祉の基礎知識』日本評論社2,300円

[参考文献]
倉本英彦著『つまずく若者たち―思春期臨床の現場から』日本評論社1,600円
齋藤高雅・高橋正雄編著『中高年の心理臨床』放送大学教育振興会2,100円

[備考]
毎回、テキストと各自用意した本科目専用のノートを持参すること

スーパービジョン研究

2単位：後期1コマ	1・2年
福山　和女	

[到達目標]
所属組織におけるソーシャルワーク業務の内容および社会福祉士の役割について系統的に説明できる。組織における後進育成の意味を理解し、自組織の新人研修・実習指導のためのスーパービジョンの方法と技術を習得させる。

[履修の条件]
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

[講義概要]
所属組織における社会福祉士の新人研修・実習プログラムの立案方法や指導の留意点を学習し、組織において後進指導の役割を担えるようにさせる。

■授業計画
第1回　新人研修・実習指導概要(講義)
第2回　新人研修・実習指導概要(講義)
第3回　新人研修・実習指導概要(講義)
第4回　新人研修・実習指導概要(講義)
第5回　新人研修・実習プログラミング(演習)
第6回　新人研修・実習のためのプログラミング(演習)
第7回　新人研修・実習プログラミング(演習)
第8回　新人研修・実習マネジメント(演習)
第9回　新人研修・実習マネジメント(演習)
第10回　後進育成・実習指導のためのスーパービジョン(演習)
第11回　新人研修・実習指導のためのスーパービジョン(演習)
第12回　組織運営管理論―人材確保策など(講義と演習)
第13回　新人研修・実習指導の課題(講義と演習)
第14回　新人研修・実習指導の課題(演習)
第15回　統括
第16回　まとめ―理論と実践の関連性

[成績評価]
試験(30%)、レポート(30%)、小テスト(20%)、課題提出(20%)、その他の評価方法(0%)

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
テキストや参考文献から、該当する理論や技術について予習・復習することを薦める。

[試験・レポート等のフィードバック]
レポートなどで、習得した知識の確認を行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。研究倫理の遵守、目的と意義妥当性、先行検討計画・遂能力研究倫理の遵守、に基づき、知識、技術、価値を検証することの必要性を学習させる。

［テキスト］
福山和女（著）（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン−人の理解の研究（MINERVA 福祉専門職セミナー）』ミネルヴァ書房　2,940円+税

［参考文献］
MINERVA 社会福祉士養成テキストブック4『ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ』ミネルヴァ書房　（2010）　2,600円+税
Lee, Robert E, Craig A. Everett（原著）, 福山和女, 石井千賀子, 日本家族研究家族療法学会評議員会（翻訳）『家族療法のスーパーヴィジョン−統合的モデル』金剛出版　（2011）3,990円+税、Kadushin,A. ほか著福山和女監修『スーパービジョンインソーシャルワーク』中央法規（2016）10,000円+税

［備考］
出席日数、学期中のレポートの提出、試験などで総合的に評価する。
参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する。

家族支援コンサルテーション研究

2単位：集中	1・2年
福山　和女	

［到達目標］
機能不全・崩壊の危機に陥っている家族への支援をしている支援者へのコンサルテーションの実際を検討できる。

［履修の条件］
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

［講義概要］
家族システムの捉え方、力動、介入について、様々なタイプの事例を家族療法、ストレス、精神分析、組織論を適用して検討できるように学ばせる。家族支援を実施している支援者に対するコンサルテーションの知識、技術、方法等を学ばせる。

■授業計画
第1回　家族システム論（講義）
第2回　コンサルテーション論（講義）
第3回　家族支援に危機介入理論の適用と、コンサルテーションの必要性（演習）
第4回　家族支援の現状と課題（講義と演習）
第5回　支援者が抱える家族支援の困難と、家族ダイナミクスと支援者のストレスとの交互作用現象（講義と演習）
第6回　家族支援の支援者の困難と組織の中の責務と立場によるリーダーシップ論、組織論（講義と演習）
第7回　支援機関における人間関係と家族支援の担当家族と支援者とのアイソモーフィズム（異種同型）について（演習）
第8回　家族支援の事例に対するコンサルテーションの介入計画（演習）
第9回　組織ストレスと支援者のストレスとの関連性と組織で発生しているスタッフの困難性を解決する視点（演習）
第10回　担当する家族における関係上の三角形と組織での支援者とスタッフにおける関係上の三角形の類似性（演習）
第11回　家族構造のなかでも世代間伝承の概念を適用し、家族理解（演習）
第12回　家族の機能不全について分析と支援するためのコンサルテーション計画（演習）
第13回　家族支援のコンサルテーションの実施計画書作成とリスクマネジメントから評価（演習）
第14回　家族支援のコンサルテーションの効果について（演習）
第15回　全15回のプロセスを統括させ家族支援のコンサルテーションの意義を理解（講義と演習）
第16回　総括

［成績評価］
試験（20%）、レポート（40%）、小テスト（10%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（0%）

［成績評価（備考）］
面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。
・やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
家族療法とコンサルテーションについては理論的背景などについて学習をしておくこと。また、現場で必要とされる知識について、ある程度の理解ができるように予習をしておくこと。復習に関しては、講義の中で指摘した個所の理解を深め、コンサルテーション実践に適用できるかどうかを点検すること。

［試験・レポート等のフィードバック］
レポートなどで、習得した内容についての確認を行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。−研究倫理の遵守、目的と意義妥当性先行検討計画・遂能力研究倫理の遵守、に基づき、人、組織、地域の尊厳の保持を順守しながら、コンサルテーションの意義を研究する。

［テキスト］
『家族療法テキストブック』日本家族研究・家族療法学会編　金剛出版　2013年
・『予防精神医学』新福尚武監訳1970年　朝倉書店

［参考文献］
・『家族評価』藤縄昭・福山和女監訳　2001年　金剛出版
・『組織のストレスとコンサルテーション』武井麻子監訳　2014年　金剛出版

非営利組織における人材育成管理研究

2単位：集中	1・2年
市川　一宏	

［到達目標］
組織の活性化を図ることができる知識と技術を習得し、中堅・指導的・管理職員として、OJT, 人材養成、チームアプローチ、職場における改革等の役割を担うことができる。

［履修の条件］
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

［講義概要］
社会福祉における専門性を前提に、所属する組織において、危機管理・PDCA サイクルによるサービスの質保障等の運営管理、人材活用・育成等の組織性を修得することを目的とする。

■授業計画

第1回　非営利組織におけるマネジメントを必要とする背景（講義）
第2回　マネジメントの概念と方法（講義）
第3回　非営利組織におけるミッションの意味（講義と事例検討）
第4回　組織活動の意義と内容の理解（講義と演習）
第5回　利用者主導のマネジメントの理解（講義と事例検討）
第6回　職場の問題解決システムと PDCA サイクル（講義と演習）
第7回　職場の課題形成プロセスの理解と応用（講義と演習）
第8回　危機管理システム等の管理システムの理解と自組織の検証（職場の課題形成プロセスの理解と応用講義と演習）
第9回　業務改善計画の推策定と進行管理、評価（講義と演習）
第10回　チームワークとリーダーシップの理解（講義と演習）
第11回　能力開発の意義の理解と実施（講義と演習）
第12回　研修プログラムの理解と企画・運営（講義と演習）
第13回　人事管理システム、労務管理システムの理解（講義と演習）
第14回　自組織における経営戦略の作成（総括）（講義）
第15回　自組織における経営戦略の作成（総括）（演習）
第16回　レポート

［成績評価］
試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（10%）

［成績評価（備考）］
面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
予習に関しては、年間のシラバスにあるテーマに関して授業ごとにレポートを分担する。分担したレポートだけでなく、関係文献もしくは自分が関わる実践現場を通して学習しておくこと。復習に関しては、講義で提示する課題を調べておくこと。各授業回に事前学習2時間、事後学習2時間が必要。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
レポート・課題に関しては、完成前の構想もしくは作成段階で報告を義務づけ、コメントを行う。その上で、レポートを完成させる。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

［テキスト］
各時間ごとに、レジメ及び担当講師の論文、各種報告書等を配布する

［参考文献］
・『福祉職員生涯研修課程「福祉職員研修テキスト」指導編、管理職編』、全国社会福祉協議会、2002年

［備考］
同一コマで遅刻と早退がある場合は合計時間を30分以内とする。
・最終レポートを提出し合格すること
・授業の第4回から第13回におけるワークシート等に記入し、発表することによって、適切かつ説得力のある説明ができるか、また他の受講生の報告について一定の理解と改善提案ができるか、評価する。
・受講生は、上記課題に対して学んだこと、及び自組織においてどのような役割を果たすことができるか、振り返りシートに記入する。そのシートに基づき、理解度が評価され知識・表現力について80点以上を可とする。80点に達しない場合は再提出を求める、又は個別に面接指導を行う。）
・第14・15回の「自組織における経営」

国際社会福祉研究 I

2単位：前期1コマ	1・2年
小高　真美	

［到達目標］
主にアメリカでのソーシャルワーク実践について理解を深めることで、わが国のソーシャルワークのあり方や今後の展望について再検討し、履修学生自らの実践活動や研究に役立つ新たな知見を得ることを目指す。

[履修の条件]
特になし。英語文献の読み方についても学習するので、これまで英語にふれる機会が少なかった方の受講も歓迎する。

[講義概要]
主にアメリカでのソーシャルワーカーの役割や実践活動について理解を深める。またソーシャルワークや関連学問領域における、海外での最新研究や実践についても触れる。履修学生は予習の段階で、事前に指定された英語文献(参考書や研究論文等)を日本語に要約する。授業では、履修学生の要約をもとに該当文献の内容を確認し、教員が解説した後、クラス全体もしくはグループで内容を討議する。

■授業計画
第1回　オリエンテーション、学習の進め方の説明
第2回　英語文献の探し方、読み方、理解の仕方
第3回　「米国でのソーシャルワーク実践：テーマ1」テキスト輪読(1)
第4回　「米国でのソーシャルワーク実践：テーマ1」テキスト輪読(2)
第5回　「米国でのソーシャルワーク実践：テーマ2」テキスト輪読(1)
第6回　「米国でのソーシャルワーク実践：テーマ2」テキスト輪読(2)
第7回　「ソーシャルワークおよび関連領域の最新研究：テーマ1」抄読(1)
第8回　「ソーシャルワークおよび関連領域の最新研究：テーマ1」抄読(2)
第9回　「ソーシャルワークおよび関連領域の最新研究：テーマ2」抄読(1)
第10回　「ソーシャルワークおよび関連領域の最新研究：テーマ2」抄読(2)
第11回　グループもしくは個別研究作業・討議(1)
第12回　グループもしくは個別研究作業・討議(2)
第13回　グループもしくは個別研究発表・討議(3)
第14回　グループもしくは個別研究発表・討議(4)
第15回　まとめ
第16回　レポート提出

[成績評価]
試験(0%)、レポート(20%)、小テスト(0%)、課題提出(80%)、その他の評価方法(0%)

[成績評価(備考)]
授業計画の第11～14回にある、グループもしくは個別研究発表と発表に使用するレジメの提出を合わせて「課題提出」とする。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
授業で輪読・抄読する英語文献の該当箇所を要約して授業にのぞむこと。授業準備に要する時間は、各自の英語読解力により異なるが、1回(2コマ)につきおおよそ1～2時間、合計8～16時間程度となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
課題については、クラス発表を行い、他の受講生や教員からのフィードバックを受ける。

[ディプロマポリシーとの関連性]
「2. 全人的なヒューマン・ケアに必要な高度な専門性」に該当する。海外におけるソーシャルワーク実践やソーシャルワークや関連領域における最新研究について学習することで、ソーシャルワーカーとしてのより高度な専門性を身につけることをねらいとする。

[テキスト]
主にアメリカの大学院等で使用されているソーシャルワーク実践やソーシャルワーカーの役割などに関するテキストや、ソーシャルワークおよび関連学問領域における海外の研究論文などを用いる。授業時に適宜示す。

[参考文献]
授業時に適宜示す。

[備考]
辞書の購入を検討している場合は、初回授業時に説明するので、授業前に購入する必要はない。

国際社会福祉研究 II

2単位：後期1コマ	1・2年
原島　博	

[到達目標]
アメリカにおける多文化ソーシャルワークの発展の歴史、理論、枠組み、内容について、Culturally Competent Practiceに関するテキストをもとに、多文化共生が唱えられる日本社会における課題を考えたい。

[履修の条件]
英語で書かれたテキストを分担して翻訳し、討議に参加することを条件とする。

[講義概要]
' Culturally Competent Practice − A Framework for understanding diverse groups and justice issues' を分担して読み進める。

■授業計画
第1回　授業の概要についてのオリエンテーション
第2回　Culturally Competent Practice
第3回　Culturally Competent Practice
第4回　Culturally Competent Practice
第5回　Social Context
第6回　Social Context
第7回　Human Rights and Social and Economic Justice
第8回　Human Rights and Social and Economic Justice
第9回　Human Rights and Social and Economic Justice
第10回　A Framework for Cultural Competence
第11回　Cultural Awareness
第12回　Knowledge Aquisition
第13回　Skill Development
第14回　Cultural Competence with Asian Americans
第15回　Cultural Competence with Lesbian, Gay, Bisex-

ual, and Transgender Persons
第16回　まとめ

［成績評価］
試験（0%）、レポート（30%）、小テスト（0%）、課題提出（70%）、その他の評価方法（0%）

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
担当となったテキストを翻訳を行い、考察する。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
授業の中でフィードバックを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉分野における広い学識と、高度な専門知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

［テキスト］
適宜資料を配布する。

［参考文献］
Doman Lum, ' Culturally Competent Practice − A Framework for understanding diverse groups and justice issues' , Brooks/Cole, 2011

社会福祉における経営管理研究

2単位：後期1コマ	1・2年
和田　敏明	

［到達目標］
所属組織の枠組みを踏まえ、相対化し、サービス管理・改善課題を把握し有効な働きかけかたの力量を向上させる

［履修の条件］
・面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。
・やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。同一コマで遅刻と早退がある場合は合計時間を30分以内とする。
・最終レポートを提出し合格すること

［講義概要］
アドミニストレーション、ヒューマンサービス経営の理論、福祉マネジメントの理論、社会福祉法人、非営利組織の経営、サービス管理について研究し、組織の意思決定、経営の基本的枠組みの理解、サービス管理の方法とその推進する力量を養成することを目的とする

■授業計画
第1回　アドミニストレーションの理論
　　概説と歩み
第2回　アドミニストレーションの理論
　　ソーシャルウェルフェアー・アドミニストレーション論
第3回　アドミニストレーションの理論
　　ソーシャルウェルフェアー・アドミニストレーション論
第4回　非営利組織の経営
第5回　非営利組織の経営
第6回　ヒューマンサービスの経営
第7回　ヒューマンサービスの経営
第8回　ヒューマンサービスの経営
第9回　社会福祉法人の経営
第10回　社会福祉法人の経営
第11回　社会福祉の改正と地域における公益的な取り組み
第12回　社会福祉の改正と地域における公益的な取り組み
第13回　組織での情報共有・継続の仕組
第14回　サービスの質の管理・リスクマネジメント
第15回　サービス評価、苦情対応
第16回　所属組織のサービス管理・改善課題と今後の自身の取組について、レポート提出

［成績評価］
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（0%）

［成績評価（備考）］
習得度は、(1)講義・文献・演習における理解度、(2)課題提出の内容により判断する。課題提出のレポートにおいてコミュニティワークの理論概念を説明でき、コミュニティワークの理論を踏まえて自身の所属組織の存在する地域社会の分析、組織の役割を評価説明でき地域介入の目標と方法等が説明できるか等で評価する

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
授業ごとに教科書の章を割り当てるので、読み進めること。
自分が経験した事例を発表しまとめること。
発表後、討議や教員の講評、教科書に書かれていることをもとに、事例の考察を深め、まとめること。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
課題レポートについては授業の際に議論やコメントを行う

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に着けている」に該当する。この科目を履修することで社会福祉分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に着けることとなる。

［テキスト］
「新しいアドミニストレーション」社会福祉−コミュニティ・サービスのためのH,B,トレッカー　今岡健一郎　監訳　　日本YMCA同盟出版部
「非営利組織の経営」P、F、ドラッカー　上田惇生　田代正美　ダイヤモンド社
「ヒューマンサービスの組織」医療・保険・福祉における経営管理　田尾雅夫　法律文化社
「ヒューマンサービスの経営」超高齢社会を生き抜くために　田尾雅夫　白桃書房
「社会福祉法人経営の現状と課題」社会福祉法人経営研究会編　全国社会福祉協議会
「改訂社会福祉法の改正のポイント」全国社会福祉協議会

［参考文献］
テーマに沿って、適宜文献を提示する

演習A（社会福祉の制度・政策）

4単位：通年	1〜2年
市川　一宏、金子　和夫、原島　博、山口　麻衣	

［到達目標］
（ねらい）
この演習では、参加者個々人の関心を基本において社会福祉の制度・政策上の問題点について、時間的な変化・発展を縦軸とし、国際比較を横軸として、深くまた広い視野を持った研究を行い、参加者の社会福祉制度、政策についての見識の深化、発展を目指す。

［履修の条件］
なし

［講義概要］
この演習では、上記4人の教員が原則として個別に指導、助言にあたるが、必要に応じて合同ゼミを持つ。

■授業計画
第1回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第2回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第3回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第4回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第5回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第6回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第7回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第8回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第9回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第10回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第11回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第12回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第13回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第14回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第15回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第16回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第17回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第18回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第19回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第20回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第21回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第22回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第23回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第24回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第25回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テー

マに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第26回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第27回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第28回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第29回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第30回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第31回　順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第32回　振り返りの討議

［成績評価］
試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（30%）

［成績評価（備考）］
レポートは各自十分な準備をして行うこと。メンバーはレポートに対し活発な検討ができる準備をすること

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
院生の修士論文指導として行うものであり、ゼミでの指導をもとに、院生は修士論文指導担当教員から個別指導を受け、課題の達成に努める。自己学習⇒修士論文指導担当教員からの指導⇒自己学習⇒ゼミでの発表と教員からのコメント⇒修士論文指導担当教員からの指導⇒自己学習という学習サイクルに位置づけられる。

［試験・レポート等のフィードバック］
報告の際にレジメを提出し、コメントを受ける。さらに上記学習サイクルに基づき、院生は学習を進める。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

［テキスト］
必要に応じて随時示す。

［参考文献］
必要に応じて随時示す。

［備考］
特になし

演習 B（社会福祉方法と技法）

4単位：通年	1〜2年
福島　喜代子、髙山　由美子	

［到達目標］
ソーシャルワーク研究について、基本的な姿勢を身につける。
自らのテーマに関する先行研究をまとめる力を身につける。
自らのテーマに関する調査研究を遂行する力をつける。
自らのテーマに関する調査結果について、分析し、考察を深める力をつける。
ソーシャルワーカーとしての実践力をつける。

［履修の条件］
ソーシャルワークに関する研究テーマを有する者であれば履修できる。特に、ソーシャルワーク、権利擁護、社会的弱者（障害者、高齢者、母子、子ども等）やその家族の支援、ソーシャルワーク専門職等に関するテーマであればなおよい。

［講義概要］
発表や討議を通して、ソーシャルワーク研究の理論や実践に焦点をあてた研究を深める。
特に論文執筆に向けて、討論や指導を行う。

■授業計画
第1回　オリエンテーションと自己紹介
第2回　ソーシャルワークと社会科学
第3回　根拠に基づくソーシャルワーク実践
第4回　社会福祉現場における問題意識Ⅰ
第5回　社会福祉現場における問題意識Ⅱ
第6回　研究テーマの絞り込みⅠ
第7回　研究テーマの絞り込みⅡ
第8回　研究の背景（問題の現状）Ⅰ
第9回　研究の背景（問題の現状）Ⅱ
第10回　研究の背景（制度・政策の整理）Ⅰ
第11回　研究の背景（制度・政策の整理）Ⅱ
第12回　リサーチクエスチョンや仮説の立て方Ⅰ
第13回　リサーチクエスチョンや仮説の立て方Ⅱ
第14回　先行研究のまとめ（対象者）Ⅰ
第15回　先行研究のまとめ（対象者）Ⅱ
第16回　先行研究のまとめ（方法や制度）Ⅰ
第17回　先行研究のまとめ（方法や制度）Ⅱ
第18回　調査の計画の仕方Ⅰ
第19回　調査の計画の仕方Ⅱ
第20回　調査の方法（質的調査）Ⅰ
第21回　調査の方法（質的調査）Ⅱ
第22回　調査の方法（量的調査）Ⅰ
第23回　調査の方法（量的調査）Ⅱ
第24回　調査結果の分析Ⅰ
第25回　調査結果の分析Ⅱ
第26回　調査結果の分析Ⅲ
第27回　考察（結果に影響を与える要因と相互作用）Ⅰ

臨床心理学専攻

修士課程

表2–1　総合人間学研究科臨床心理学専攻　修士課程（2018年度）2017年度以前入学者用授業科目表

		授業科目の名称	担当教員	配当年次	単位数又は時間数			開講状況
					必修	選択	自由	
授業科目の概要	基礎研究科目	臨床心理学特論Ⅰ	加藤　純	1・2	2			前期1
		臨床心理学特論Ⅱ	植松晃子	1・2	2			前期1
		臨床心理面接特論Ⅰ	石川与志也	1・2	2			前期1
		臨床心理面接特論Ⅱ	田副真美	1・2	2			後期1
		臨床心理査定演習Ⅰ	田副真美	1・2	2			前期1
		臨床心理査定演習Ⅱ	植松晃子	1・2	2			後期1
	実習	臨床心理基礎実習Ⅰ	植松晃子/石川与志也/谷井　淳一/加藤　純	1	1			通年1
		臨床心理基礎実習Ⅱ	植松晃子/石川与志也/谷井　淳一/加藤　純	1	1			通年1
		臨床心理実習Ⅰ	田副真美/高城絵里子	2	1			通年1
		臨床心理実習Ⅱ	田副真美/高城絵里子	2	1			通年1
	特別研究	特別研究A（臨床心理援助方法研究）	加藤　純/谷井淳一/田副真美/植松晃子	1・2	4			通年1
		特別研究B（キリスト教と臨床心理学）	ジェームズ・サック	1・2	4			通年1
専門科目	臨床心理援助方法研究領域	心理学研究法特論	北村英哉	1・2		2		前期1
		心理統計法特論Ⅰ	谷井淳一	1・2		2		前期1
		心理統計法特論Ⅱ	谷井淳一	1・2		2		後期1
		臨床心理学研究法特論	沖潮　満里子	1・2		2		集中
		人格心理学特論		1・2		2		閉講
		発達心理学特論	高城　絵里子	1・2		2		後期1
		社会心理学特論		1・2		2		閉講
		集団力学特論		1・2		2		閉講
		学校臨床心理学特論	菊池知美	1・2		2		前期1
		心理療法特論Ⅰ（交流分析）	白井幸子	1・2		2		前期1
		心理療法特論Ⅱ（児童臨床心理）	加藤　純	1・2		2		後期1
		心理療法特論Ⅲ（SST）		1・2		2		閉講
		投映法特論	分島芳子	1・2		2		前期1
		心理療法スーパービジョン特論	福山和女	1・2		2		前期1
		家族療法特論	福山和女	1・2		2		後期1
		児童虐待の理解と対応		1・2		1		閉講
		サイコドラマ特論	谷井淳一	1・2		2		前期1
	キリスト教と臨床心理学研究領域	キリスト教倫理学特論		1・2		2		2019
		牧会カウンセリング特論	ジェームズ・サック	1・2		2		後期1
		臨床死生学特論	白井幸子	1・2		2		後期1
	精神保健研究領域	精神医学特論	倉本英彦	1・2		2		前期1
		心身医学特論	三宅　永	1・2		2		集中

	日本語論文の書き方（留学生対象）		1・2	2※				

※留学生のみ必修　卒業要件単位には含まれない

表2–2　総合人間学研究科臨床心理学専攻　修士課程（2018年度）2018年度入学者用授業科目表

授業科目の名称			担当教員	配当年次	単位数又は時間数			開講状況
					必修	選択	自由	
基礎研究科目		臨床心理学特論Ⅰ	加　藤　　純	1・2	2			前期1
		臨床心理学特論Ⅱ	植　松　晃　子	1・2	2			後期1
		臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）	石　川　与志也	1・2	2			前期1
		臨床心理面接特論Ⅱ	田　副　真　美	1・2	2			後期1
		臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）	田　副　真　美	1・2	2			前期1
		臨床心理査定演習Ⅱ	植　松　晃　子	1・2	2			後期1
実習		臨床心理基礎実習Ⅰ	植松晃子／石川与志也／谷井淳一／加藤　純	1	1			通年1
		臨床心理基礎実習Ⅱ	石川与志也／植松晃子／谷井淳一／加藤　純	1	1			通年1
		臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習）	田副真美／高城絵里子	2	1			2019
		臨床心理実習Ⅱ	田副真美／高城絵里子	2	1			通年1
特別研究		特別研究Ａ（臨床心理援助方法研究）	加藤　純／谷井淳一／田副真美／植松晃子	1・2	4			通年1
		特別研究Ｂ（キリスト教と臨床心理学）	ジェームズ・サック	1・2	4			通年1
専門科目	臨床心理援助方法研究領域	心理学研究法特論	北　村　英　哉	1・2		2		前期1
		心理統計法特論Ⅰ	谷　井　淳　一	1・2		2		前期1
		心理統計法特論Ⅱ	谷　井　淳　一	1・2		2		後期1
		臨床心理学研究法特論	沖　潮　満里子	1・2		2		集中
		発達心理学特論	高　城　絵里子	1・2		2		後期1
		教育心理学特論	北　村　英　哉	1・2		2		後期1
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	室　城　隆　之	1・2		2		集中
		家族心理学特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）	福　山　和　女	1・2		2		後期1
		精神医学特論	倉　本　英　彦	1・2		2		前期1
		心身医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）	三　宅　　永	1・2		2		集中
		心理療法特論Ⅰ（交流分析）	白　井　幸　子	1・2		2		前期1
		心理療法特論Ⅱ（児童臨床心理）	加　藤　　純	1・2		2		後期1
		投映法特論	分　島　芳　子	1・2		2		前期1
		サイコドラマ特論	谷　井　淳　一	1・2		2		前期1
		心理療法スーパービジョン特論	福　山　和　女	1・2		2		前期1
		福祉分野に関する理論と支援の展開	加　藤　　純	1・2		2		後期1
		学校臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）	菊　池　知　美	1・2		2		前期1
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	渡　邉　祐　子	1・2		2		前期1
		心の健康教育に関する理論と実践	田　副　真　美	1・2		2		後期1
	キリスト教と臨床心理学研究領域	キリスト教倫理学特論		1・2		2		2019
		牧会カウンセリング特論	ジェームズ・サック	1・2		2		後期1
		臨床死生学特論	白　井　幸　子	1・2		2		後期1

	日本語論文の書き方（留学生対象）		1・2	2※			通年1

※留学生のみ必修　卒業要件単位には含まれない

臨床心理学特論 I

2単位：前期	1・2年　必修
加藤　純	

[到達目標]
高度専門職としての臨床心理士に必要な倫理性、社会性、臨床心理学の基礎知識と技法を学ぶことを目的とする。

[履修の条件]
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。原則として1年次前期に履修する。

[講義概要]
臨床心理学を広く包括的な視野から学ぶ。
現代の臨床心理学は、障害や苦痛の低減を目的とするだけでなく、より豊かな人間の一生の幸福と創造性の追究を目的とするものへと発展してきている。
臨床心理学の歴史と今日的課題, 主要理論, 方法, 対象及び社会的意義についての基礎知識を学ぶと同時に, 臨床心理学的人間観・人間理解の方法を検討・考察する。

■授業計画

第1回　オリエンテーション
　1)授業の概要　2)この授業で望むもの
　3)自己紹介　4)各自が目指す臨床心理士像。
第2回　臨床心理学とは何か
　1)臨床心理学の目指すもの
　2)「健康」と「病」
　3)学(理論)と実践
第3回　臨床心理の専門性
　1)対象：個人, グループ, 家族, コミュニティ
　2)専門行為：査定, 面接, 地域支援, 研究
　3)臨床心理の専門性と資格制度
第4回　臨床心理の人間観：クライエントを人として尊重する見立ての方法(1) 人のこころをどのように見立てるか
第5回　臨床心理面接技法の全体像
第6回　臨床心理の歴史と主要理論の系譜
第7回　様々な臨床心理援助(1)クライエント中心療法の人間観と理論
第8回　様々な臨床心理援助(1)クライエント中心療法の実践例
第9回　様々な臨床心理援助(2)認知行動療法の人間観と理論・実践例
第10回　様々な臨床心理援助(3)ブリーフセラピーの理論と実践例
第11回　見立ての方法(2)診断基準とクライエント理解。DSM5の基礎。
第12回　様々な臨床心理援助(4)精神分析の人間観と理論・実践例
第13回　様々な臨床心理援助(5)分析心理学。アドラー心理学。
第14回　様々な臨床心理援助(6)表現芸術療法。箱庭療法。
第15回　専門職としての責任。倫理規程。
第16回　-

[成績評価]
試験(0%)、レポート(50%)、小テスト(0%)、課題提出(20%)、その他の評価方法(30%)

[成績評価(備考)]
その他は、ディスカッションなど授業への参加度。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
参考文献を積極的に読んでください。関心を持ったアプローチに関する有名な原著(翻訳で可)に触れることをお勧めします。本科目では各授業回に4時間の準備学習(予習・復習等)が必要です。合計15回の授業で60時間となります。

[試験・レポート等のフィードバック]
期末レポートはメールボックスを通して返却します。レポートをメールで提出された場合、メールへの返信によりコメントします。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とします。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指します。

[参考文献]
国分康孝(1980)『カウンセリングの理論』誠信書房
下山晴彦(2009)『よくわかる臨床心理学』ミネルヴァ書房
日本臨床心理士資格認定協会『新・臨床心理士になるためには』最新版(毎年8月頃発行)
G. Egan(鳴澤實他訳1998)『熟練カウンセラーをめざすカウンセリング・テキスト』創元社
R. R. Carkhuff(日本産業カウンセラー協会訳1992)『ヘルピングの心理学』講談社現代新書
A. E. Ivey(福原真知子他訳1985)『マイクロカウンセリング』川島書店
下山晴彦(2001)『講座臨床心理学』東京大学出版会
宮井研治『子ども・家族支援に役立つ面接の技とコツ』明石書店
津川秀夫・大野裕史(2014)『認知行動療法とブリーフセラピーの接点』日本評論社
精神療法編集部(2014)『先達から学ぶ精神療法の世界：著者との対話への招待』精神療法増刊第1号

臨床心理学特論 II

2単位：後期	1・2年　必修
植松　晃子	

[到達目標]
臨床心理の専門家が実際に活動する際に必要な理論、アセスメントについての理解を進めながら、心理療法についてさらに深く理解する。

[履修の条件]
当大学院、臨床心理学専攻に正規に在籍する学生のみ履修で

きる。臨床心理学専攻の必修科目である。原則的として全ての授業に出席することが履修条件となる。

［講義概要］
臨床心理学特論Ⅰで学んだ基礎の上に立って、各自が関心を持つ臨床心理の現場を意識しつつ、心理療法の中でどのようにケース理解を進めていくのか、アセスメントについて学びます。テキストを担当制で読み進めます。シラバスは適宜変更されます。

■授業計画
第1回　オリエンテーション・事例理解の視点
第2回　事例の理解の視点1アセスメントと心理療法の関係
第3回　事例の理解の視点2アセスメントの基本的視点
第4回　事例の理解の視点3アセスメントの基本的視点
第5回　事例の理解の視点4アセスメントの基本的視点
第6回　事例の理解の視点5アセスメントの理論的背景
第7回　事例の理解の視点6アセスメントの理論的背景
第8回　事例の理解の視点7アセスメントの理論的背景
第9回　事例の理解の視点8人格の発達水準と病理
第10回　事例の理解の視点9人格の発達水準と病理
第11回　事例の理解の視点10人格の発達水準と病理
第12回　事例の理解の視点11一次的防衛機制の理解
第13回　事例の理解の視点12二次的防衛機制の理解
第14回　事例の理解の視点13心理療法過程とアセスメント
第15回　事例の理解の視点14心理療法過程とアセスメント
第16回　まとめ

［成績評価］
試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（70%）、その他の評価方法（30%）

［成績評価（備考）］
授業への参加態度

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
各自の専門性探求の場として、積極的な参加を求める。自分がまとめを担当した箇所でなくても事前に資料には目を通し、でぃずかっしょんに積極的に参加すること。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
授業中にフィードバック、コメントを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

［テキスト］
・ナンシー・マックウイリアムズ「パーソナリティ障害の治療と診断」創元社
・ナンシー・マックウイリアムズ「ケースの見方・考え方」創元社

［参考文献］
適宜紹介する

［備考］
＊課題提出：授業時の課題発表

臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）

2単位：前期	1・2年　必修
石川　与志也	

［到達目標］
ガイダンス/コンサルテーション、カウンセリング、心理療法の基礎技法としての臨床心理面接法の基礎理論および基本的態度を理解すること。精神分析、来談者中心療法、認知行動療法の理論を踏まえ、特に、精神分析的心理療法の基本的態度と技法の基礎理論の理解を中心において、臨床心理面接の基礎を学ぶ

［履修の条件］
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。毎回出席すること。原則として欠席が3回を超えた場合は不可とする。また、遅刻二回で欠席一回換算とする。遅刻が授業時間の半分を超えた場合は欠席とする。

［講義概要］
臨床の実際におけるガイダンス、カウンセリング、心理療法の基礎技法としての臨床心理面接法の基礎理論の理解を進め、その関連諸科学との関係、技法構成上の基本原理の検討を行う。
講義内容は、以下の内容を含む。
1. 力動論に基づく心理療法の理論と方法
2. 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法
3. その他の心理療法の理論と方法
4. 心理に関する相談、助言、指導等への上記1～3の応用
5. 心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整

なお、基本的にはシラバスに沿って進めるが、授業計画は適宜変更することがある。

■授業計画
第1回　オリエンテーション：臨床面接法とは何か
第2回　心理療法の危機
第3回　心理療法の歴史
第4回　心理療法の理論と方法：三大学派の基礎
第5回　臨床心理学的処方の目的と方法
第6回　臨床的態度
第7回　クライエントになる
第8回　心理学的心性
第9回　心理療法装置Ⅰ：治療的場の生成
第10回　心理療法装置Ⅱ：心理療法の過程論
第11回　抵抗
第12回　転移と逆転移
第13回　臨床心理査定に応じた臨床心理学的処方
第14回　スーパーヴィジョン

第15回　心理療法家の専門性と倫理
第16回　レポート

［成績評価］
試験（0%）、レポート（40%）、小テスト（0%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（30%）

［成績評価（備考）］
ディスカッションへの主体的な取り組みを評価する。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
テキストおよび配布文献の指定箇所を事前に読んでおくことが課せられる。
また、参考文献を読み進め、基礎理論の理解を深めていくこと。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
・提出された課題に対するフィードバックを次回の講義内容において行う。
・期末レポートの評価について個別のフィードバックが必要な場合は、個別に対応するので教員にアポイントメントを取ること。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

［テキスト］
特に指定しない。随時、文献を配布する。

［参考文献］
小谷英文編著（2008）ニューサイコセラピィーグローバル社会における安全空間の創成. 風行社.
小谷英文（2009）ダイナミックコーチング. PAS心理教育研究所出版部.
小谷英文編著（2010）現代心理療法入門. PAS心理教育研究所出版部.
Appelbaum, S. A.（1973）. Psychological−mindedness：Word, Concept, and Essence. International Journal of Psychoanalysis, 54, 35−46.
Fromm−Reichmann, F.（1950）. Principles of intensive psychotherapy. Chicago：University of Chicago Press.
Horner, A.（1991）. Psychoanalytic object relations therapy. New York：Jason Aronson.
Langs, R.（1973）. The technique of psychoanalytic psychotherapy. Vol.1. New York：Jason Aronson.
Malan, D. H.（1979）. Individual Psychotherapy and the Science of Psychodynamics. London：Butterworth.（鈴木龍訳（1992）心理療法の臨床と科学. 誠信書房）
Rockland, L. H.（1989）. Supportive therapy：A psychodynamic approach. Basic Books.
Rogers, C.R.（1942）Counseling and Psychotherapy. Boston：Houghton Mifflin Company.
Sandler, J., Dare, C., Holder, A.（1992）. The patient and the analyst ［2nd edition］. London：Karnac.（藤山直樹・北山修監訳（2008）患者と分析者〔第2版〕. 誠信書房）
Sullivan, H. S.（1954）. The Psychiatric interview. New York：Norton.
（中井久夫他訳（1986）精神医学的面接. みすず書房.）

臨床心理面接特論 II

2単位：後期	1・2年　必修
田副　真美	

［到達目標］
自律訓練法および認知行動療法についての理論、実際を学び臨床現場におけるその有用性を理解する。

［履修の条件］
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
臨床心理学専攻1年後期の必修科目である。

［講義概要］
認知行動療法および自律訓練法を取り上げ、その理論、実際について講義する。また、ロールプレイや体験を通して実際的な技法を学ぶ。後半では、主に医療領域における心理臨床について講義し、事例を提示しグループによる検討や発表の時間も設ける予定である。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
第2回　自律訓練法とは
第3回　自律訓練法の標準公式の説明と体験
　①　背景公式
　②　第1公式　四肢重感練習
　③　第2公式　四肢温感練習
第4回　自律訓練法の標準公式の説明と体験
　④　第3公式　心臓調整練習
　⑤　第4公式　呼吸調整練習
　⑥　第5公式　腹部温感練習
　⑦　第6公式　額部涼感練習
第5回　自律訓練法の実際
第6回　認知行動療法の概要
第7回　認知行動療法の体験と解説：アセスメント①
第8回　認知行動療法の体験と解説：アセスメント②
第9回　認知行動療法の体験と解説：アセスメント③
第10回　認知行動療法の体験と解説：認知再構成法①
第11回　認知行動療法の体験と解説：認知再構成法②
第12回　認知行動療法の体験と解説：認知再構成法③、DVD視聴
第13回　認知行動療法の体験と解説：問題解決法①
第14回　認知行動療法の体験と解説：問題解決法②、DVD視聴
第15回　まとめ
第16回　レポート

［ 成績評価 ］
試験（0％）、レポート（40％）、小テスト（0％）、課題提出（40％）、その他の評価方法（20％）

［ 成績評価（備考） ］
授業中のディスカッションやロールプレイングにおける態度。

［ 予習・復習の内容及びそれに必要な時間 ］
自律訓練法を講義以外の時間にも実施し、訓練記録を記入する。
認知行動療法の体験では、毎回ホームワークを出し、自宅で実施してもらい、その報告をする。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［ 試験・レポート等のフィードバック ］
リアクションペーパーに対するフィードバックを次回の講義内容にて行う。
発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

［ ディプロマポリシーとの関連性 ］
「3. 総合的・実践的な学習能力」に該当する。公認心理師や臨床心理学の専門家としての実践的な知識と秘術を身に付けることができる。

［ テキスト ］
必要な資料を適宜配布する。

［ 参考文献 ］
松岡洋一、松岡素子　「自律訓練法」日本評論社2,730円
伊藤絵美「認知療法・認知行動療法カウンセリング初級ワークショップ−CBT カウンセリング」星和書店　2,520円
伊藤絵美・石垣琢磨（監）「認知行動療法を身につける」金剛出版　2,800円

［ 備考 ］
体験型の授業のため、遅刻や欠席をしないよう心掛けてほしい。

臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）

2単位：前期	1・2年　必修
田副　真美	

［ 到達目標 ］
心理的アセスメントの目的及び倫理を理解する。心理臨床現場で利用されることの多い心理検査について検査者および被検査者を体験し、各テストの内容および実施における倫理上の問題について十分理解できるようにする。さらに、アセスメントレポートを作成するなど実践的な力を身につける。

［ 履修の条件 ］
本学大学院、臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
臨床心理学専攻科1年前期の必修科目である。
心理検査の基礎的な知識があること。

［ 講義概要 ］
心理的アセスメントの目的及び倫理、心理アセスメントの方法について講義する。
心理臨床現場で実施されている主要な心理検査についての理論・実施方法・採点法・解釈法について講義する。また、実際に学生同士で相互に実施し合い、その結果をアセスメントしレポートを学生自身が作成する。臨床現場における心理アセスメントの実際についても講義する。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
　　心理的アセスメントの目的及び倫理
　　臨床現場や対象による心理検査の実施の仕方
第2回　心理的アセスメントの方法（観察、面接及び心理検査）
第3回　心理検査について（質問紙法、投映法）
第4回　質問紙法（STAI,SDS,CMI,POMS など）：事例と所見の書き方
第5回　質問紙法（STAI,SDS,CMI,POMS など）：事例と所見の書き方
第6回　P-F スタディ：理論、実施法、採点と解釈②
第7回　P-F スタディ：事例と所見の書き方
第8回　SCT：理論、実施法、採点と解釈
第9回　バウムテスト：理論、実施法、採点と解釈①
第10回　バウムテスト：理論、実施法、採点と解釈②
第11回　バウムテスト：事例と所見の書き方
第12回　HTP 法（ゲストスピーカー）：理論、実施法、採点と解釈
第13回　風景構成法：理論、実施法、採点と解釈
第14回　総合アセスメント：テストバッテリー、事例提示
第15回　報告書の書き方
第16回　レポート

［ 成績評価 ］
試験（0％）、レポート（50％）、小テスト（0％）、課題提出（30％）、その他の評価方法（20％）

［ 成績評価（備考） ］
授業への積極的な取組姿勢。

［ 予習・復習の内容及びそれに必要な時間 ］
連続した授業が多いため、必ず実施、採点、解釈の仕方について復習をすることが望ましい。
本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［ 試験・レポート等のフィードバック ］
リアクションペーパーに対するフィードバックを次回の講義内容にて行う。
発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

［ ディプロマポリシーとの関連性 ］
「3. 総合的・実践的な学習能力」に該当する。公認心理師や臨床心理学の専門家としての実践的な知識と秘術を身に付けることができる。

[テキスト]
必要な資料を適宜配布する。

[参考文献]
小山充道「臨床心理アセスメント」金剛出版
沼　初枝「臨床心理アセスメントの基礎」沼　初枝　ナカニシ出版
カール・コッホ（著）岸本寛史、中島ナオミ、宮崎忠男（訳）「バウムテスト［第3版］-心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究-」誠心書房

臨床心理査定演習 II

2単位：後期	1・2年　必修
植松　晃子	

[到達目標]
臨床心理の現場で利用されることが多い知能検査について、査定者及び被査定者を体験しながら、各検査の内容および実施における倫理上の問題について、十分理解できるようにする。

[履修の条件]
当大学院、臨床心理学専攻に在籍する正規の学生のみ履修できる。臨床心理学専攻の必修科目である。原則的に全ての授業に出席することが履修条件となる。

[講義概要]
各検査の理論的説明の後、実際に体験学習をし、その結果をアセスメントしレポートを作成することにより、授業で扱う心理検査を総合的に理解する。基本的に授業計画に沿って進めるが、適宜変更することもある。

■授業計画
第1回　一般的な知能検査プロセスの理解
第2回　知能検査：田中ビネー理論
第3回　知能検査：田中ビネー演習1
第4回　知能検査：田中ビネー演習2
第5回　知能検査：田中ビネー採点・解釈法・所見レポート
第6回　知能検査：WISC－Ⅲ理論
第7回　知能検査：WISC－Ⅲ演習
第8回　知能検査：WISC－Ⅲ採点方法の理解
第9回　知能検査：WISC－Ⅲ解釈・所見
第10回　知能検査：WAIS－Ⅲ理論
第11回　知能検査：WAIS－Ⅲ演習
第12回　知能検査：WAIS－Ⅲ採点方法の理解
第13回　知能検査：WAIS－Ⅲ解釈法・所見レポート
第14回　知能検査：テストバッテリーの理解
第15回　知能検査：テストバッテリーの理解
第16回　まとめ

[成績評価]
試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（70%）、その他の評価方法（30%）

[成績評価（備考）]
授業への参加態度を評価する。特に、体験学習の前にしっかりマニュアルを読み真剣に取り組むこと。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
心理検査は、検査内容を理解したうえで実施することが必須になるため、マニュアルを熟読しておくことを求める。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
所見レポートは授業中にコメント・評価を付けて返却する。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

[テキスト]
適宜資料を配布する

[参考文献]
基礎知識として、知能検査関連の文献に目を通しておくと良いでしょう。
参考資料は適宜紹介します。
・願興寺礼子・吉住隆弘「心理検査の実施の初歩」ナカニシヤ出版

臨床心理基礎実習 I

1単位：通年	1年　必修
植松　晃子、石川　与志也、谷井　淳一、加藤　純	

[到達目標]
心理臨床的な面接についての基本的な知識とともに、臨床家として必要な態度について学ぶ。後期の基礎実習 II および2年次の臨床心理実習に備えるため、臨床的態度を身に付け、自分の強みおよび自己課題を明確にすることを目標にします。

[履修の条件]
本大学院、臨床心理学専攻に正規に在籍する学生のみ履修できる。臨床心理学専攻1年生の必修科目である。毎回出席すること。原則として欠席が三回を超えた場合は不可とする。また、遅刻二回で欠席一回換算とする。遅刻が授業時間の半分を超えた場合は欠席とする。

[講義概要]
火曜日3限に院1年次の院生のグループ学習を行う。
講義およびワークショップ、ロールプレイ等の演習を通じて、上記の到達目標の実現に向けた臨床訓練を行う。なお、体験型のクラスなので、履修者の人数、クラス展開によってはシラバスの内容が前後したり、変更されることがある。

■授業計画

第1回　オリエンテーション
第2回　心理臨床家に必要な態度1：内的世界への関心
第3回　心理臨床家に必要な態度2：心理的接触
第4回　心理臨床家に必要な態度3：臨床的態度
第5回　自己課題を整理する1
第6回　心理療法の焦点1
第7回　心理療法の焦点2
第8回　心理療法のプロセス展開の理解1
第9回　心理療法のプロセス展開の理解2
第10回　ロールプレイ演習1：安全空間の生成
第11回　ロールプレイ演習2：体験の記述
第12回　ロールプレイ演習3：主訴を聴く
第13回　ロールプレイ演習4：技法の修得
第14回　ロールプレイ演習5：技法の修得
第15回　ロールプレイ演習6：技法の修得
第16回　臨床心理基礎実習Ⅰのまとめ（期末レポート）
第17回　臨床的態度
第18回　心理療法的場の生成技術（1）
第19回　心理療法的場の生成技術（2）
第20回　心理療法的場の生成技術（3）
第21回　面接展開の基本技術（1）
第22回　面接展開の基本技術（2）
第23回　面接展開の基本技術（3）
第24回　面接展開の基本技術（4）
第25回　面接展開の基本技術（5）
第26回　ケースフォーミュレーション（1）
第27回　ケースフォーミュレーション（2）
第28回　ケースフォーミュレーション（3）
第29回　ケースマネジメント（1）
第30回　ケースマネジメント（2）
第31回　ケースマネジメント（3）
第32回　基礎実習のまとめ（期末レポート）

［成績評価］
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（50%）

［成績評価（備考）］
その他の評価方法として、ディスカッションやワークショップ、ロールプレイ等への主体的な取り組みを評価する。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
各自、専門家としての自分の課題や気づきをまとめる臨床ノートを作ること。自分が掴みたいことや取り組みたいことを明確にしながら授業に臨み、授業後には自らの体験を言葉にすることや自己理解を進めていってほしい。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
適宜、質問の時間を設ける。各自がそれぞれに。授業で掴んだこと、目標を自分で確かめながら進めて行く。レポートは後期の授業内でコメント及びフィードバックを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うためのすぐれた能力」を身に付けることを目的とする。特に臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門家としての使命と社会的責任」、「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」、「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

［テキスト］
授業時に適宜紹介する

［参考文献］
適宜紹介するが、以下の文献は是非一度読んでおくこと
・C.R. ロジャース「主要著作集」1～3巻　岩崎学術出版
・H. カーシェンバウム・V.L. ヘンダーソン（編）「ロジャース選集」上下巻　誠信書房
・小谷英文編「現代臨床心理入門」PAS心理教育研究所出版部

臨床心理基礎実習Ⅱ

1単位：通年	1年　必修
石川　与志也、植松　晃子、谷井　淳一、加藤　純	

［到達目標］
インテーク面接、カウンセリング、心理療法における基本的態度および基本技法・技術、アセスメント技術、ケースマネージメントの考え方を体験的に身につけることを目標とする。アセスメントに関しては、記述データからのアセスメントだけでなく、面接の中での相互作用を通した仮説検証プロセスに基づくアセスメント技術の基礎を身につけることを目標とする。また、実習を通じて臨床家としての自己課題の明確化および臨床家としての自分を訓練する自分を育てることを目指す。

［履修の条件］
1年前期で臨床心理基礎実習Ⅰをし、本大学院臨床心理学専攻に正規に在学している学生のみ習得できる。
毎回出席すること。原則として欠席が3回を超えた場合は不可とする。また、遅刻二回で欠席一回換算とする。遅刻が授業時間の半分を超えた場合は欠席とする。

［講義概要］
火曜日に1、2年合同で開催されるケースカンファレンスに参加。

■授業計画

第1回　ケースカンファレンス（1）
第2回　ケースカンファレンス（2）
第3回　ケースカンファレンス（3）
第4回　ケースカンファレンス（4）
第5回　ケースカンファレンス（5）
第6回　ケースカンファレンス（6）
第7回　ケースカンファレンス（7）
第8回　ケースカンファレンス（8）
第9回　ケースカンファレンス（9）
第10回　ケースカンファレンス（10）

第11回　ケースカンファレンス(11)
第12回　ケースカンファレンス(12)
第13回　ケースカンファレンス(13)
第14回　ケースカンファレンス(14)
第15回　ケースカンファレンス(15)
第16回　ケースカンファレンス(16)
第17回　ケースカンファレンス(17)
第18回　ケースカンファレンス(18)
第19回　ケースカンファレンス(19)
第20回　ケースカンファレンス(20)
第21回　ケースカンファレンス(21)
第22回　ケースカンファレンス(22)
第23回　ケースカンファレンス(23)
第24回　ケースカンファレンス(24)
第25回　ケースカンファレンス(25)
第26回　ケースカンファレンス(26)
第27回　ケースカンファレンス(27)
第28回　ケースカンファレンス(28)
第29回　ケースカンファレンス(29)
第30回　ケースカンファレンス(30)
第31回　ケースカンファレンス(31)
第32回　ケースカンファレンス(32)まとめ

[成績評価]
試験(0%)、レポート(50%)、小テスト(0%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(50%)

[成績評価(備考)]
ディスカッションやワークショップ、ロールプレイ等への主体的な取り組みを評価する。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
本科目では各授業回に4時間の準備学習(予習・復習等)を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。テキストおよび参考文献を自分で読み進めること。自分の臨床ノートを作ること。

[試験・レポート等のフィードバック]
・提出された課題に対するフィードバックを次回の講義内容において行う。
・期末レポートの評価について個別のフィードバックが必要な場合は、個別に対応するので教員にアポイントメントを取ること。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

[テキスト]
特に指定せず。適宜、文献の紹介および配布を行う。

[参考文献]
小谷英文編著(2008)ニューサイコセラピィーグローバル社会における安全空間の創成. 風行社.
小谷英文(2009)ダイナミックコーチング. PAS心理教育研究所出版部.
小谷英文編著(2010)現代心理療法入門. PAS心理教育研究所出版部.
土居健郎(1992)新訂方法としての面接. 医学書院.
Fromm−Reichmann, F. (1950). Principles of intensive psychotherapy. Chicago：University of Chicago Press.
Horner, A. E. (1991). Psychoanalytic object relations therapy. Northvale：Jason Aronson Inc.
Langs, R. (1973). The technique of psychoanalytic psychotherapy. Vol.1. New York：Jason Aronson.
McWilliams, N. (1999). Psychoanalytic case formulation. New York：Guilford Press.
(成田善弘監訳　(2006)ケースの見方・考え方−精神分析的ケースフォーミュレーション. 創元社)
Sandler, J., Dare, C., Holder, A. (1992). The patient and the analyst ［2nd edition］. London：Karnac. (藤山直樹・北山修監訳(2008)患者と分析者〔第2版〕. 誠信書房)
Sullivan, H. S. (1954). The Psychiatric interview. New York：Norton.
(中井久夫他訳(1986)精神医学的面接. みすず書房.)

臨床心理実習Ⅰ

1単位：通年	2年　必修
田副　真美、高城　絵里子	

[到達目標]
臨床心理の専門家として現場に立つ総仕上げの意味をもち、実際に現場での実習体験を通じて、その意義や限界、課題について学ぶ。

[履修の条件]
本大学院臨床心理学専攻に正規に在籍している学生のみが履修できる。
臨床心理学専攻2年生の必修科目である。
臨床心理基礎実習で学んだ知識および体験学習が身についていることを履修の条件とする。

[講義概要]
講義および演習で学んだ臨床心理学の知識と技術を学内、学外実習という実際の臨床の場での経験を統合していく。毎週所定の日に、学内付属機関および指定の実習先機関で、臨床心理士の資格を有するスーパーヴァイザーからスーパーヴィジョンを受けながら実習する。陪席、インテーク面接、心理面接、心理査定などを経験し徐々に役割を増やし、記録のとり方や細かな配慮など心理臨床の実際について学ぶ。学外実習先機関での経験は、毎週第3講時の授業の中で、グループ・スーパーヴィジョンを受ける。この中で、互いの経験を交流し、共有する。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
　　内部実習、外部実習に関する諸注意
第2回　ケースカンファレンスの進め方
第3回　実習指導①
　　実習への動機と目標を定める

第4回　実習指導②
実習記録の役割ついて理解し、書き方を学ぶ
第5回　実習指導③
実習におけるスーパーヴィジョンの役割と方法について理解する
第6回　実習指導④
各実習先での経験を共有し、まずは実習先施設の理解を深める
第7回　実習指導⑤
各実習先での経験を共有し、実習先利用者のニーズや社会的状況を理解する
第8回　実習指導⑥
各実習先での経験を共有し、実習先の理念や目標を理解する
第9回　実習指導⑦
各実習先での経験を共有し、実習先におけるプログラムの役割について考える
第10回　実習指導⑧
各実習先での経験を共有し、実習先における心理職の役割と姿勢について考察する
第11回　実習指導⑨
各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の感情に目を向け、内省を深める
第12回　実習指導⑩
各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の感情に目を向け、内省を深める
第13回　実習指導⑪
各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の特徴について気付きを得る
第14回　実習指導⑫
各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の特徴について気付きを得る
第15回　実習指導⑬
各実習先での経験を共有し、心理的援助の基本である受容と共感について理解を深める）
第16回　前期実習のまとめ
第17回　学外実習報告
第18回　（以下第32回まで第3講時グループ sv）
実習指導⑭
改めて実習目標について考える。観察及び考察の対象を焦点化した上で実習
第19回　実習指導⑮
各実習先での経験を共有し、心理的援助の基本である受容と共感について理解を深める
第20回　実習指導⑯
各実習先での経験を共有し、体験に基づいた臨床心理アセスメントについて考え方と姿勢を学ぶ
第21回　実習指導⑰
各実習先での経験を共有し、体験に基づいた臨床心理アセスメントについて考え方と姿勢を学ぶ
第22回　実習指導⑱
各実習先での経験を共有し、陪席やプログラム参加などの体験を通して、対人援助の姿勢と方法を考察する
第23回　実習指導⑲
各実習先での経験を共有し、陪席やプログラム参加などの体験を通して、対人援助の姿勢と方法を考察する
第24回　実習指導⑳
各実習先での経験を共有し、陪席やプログラム参加などの体験を通して、対人援助の姿勢と方法を考察する
第25回　実習指導㉑
各実習先での経験を共有し、実習先における心理職の役割と他職種との連携について理解を深める
第26回　実習指導㉒
各実習先での経験を共有し、実習先における心理職の役割と他職種との連携について理解を深める
第27回　実習指導㉓
各実習先での経験を共有し、実習先における心理職の役割と他職種との連携について理解を深める
第28回　実習指導㉔
各実習先での経験を共有し、体験の中で、アセスメントに基づいた対応を模索し実践する
第29回　実習指導㉕
各実習先での経験を共有し、体験の中で、アセスメントに基づいた対応を模索し実践する
第30回　実習指導㉗
各実習先での経験を共有し、体験の中で、アセスメントに基づいた対応を模索し実践する
第31回　実習指導㉘
各実習先での経験を共有し、実習終了に伴う別れの作業について議論し、振り返りを行う
第32回　後期実習のまとめ

［成績評価］
試験（0%）、レポート（30%）、小テスト（0%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（50%）

［成績評価（備考）］
学内および学外実習の評価・実習記録・ケースカンファレンスにおける事例報告とその考察の内容により総合的に評価する。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
学内、学外実習およびケースカンファレンスについて、不足している知識を随時文献や専門書において復習することが望ましい。
ケースカンファレンス参加後、毎回その感想を発表者に提出する。

［試験・レポート等のフィードバック］
毎回提出する実習記録については実習先担当教員および実習先スーパーヴァイザーによるフィードバックを行う。
グループ・スーパーヴィジョンおよびケースカンファレンスでの発表については、授業内で教員が適宜コメントを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な、「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

［テキスト］
特にない。
実習やカンファレンスに有用な文献やテキストは、適宜紹介する。

[参考文献]
鑪　幹八郎、名島潤慈「新版心理臨床家の手引き」誠信書房 3,800円

臨床心理実習 II

1単位：通年	2年　必修
田副　真美、高城　絵里子	

[到達目標]
臨床心理実習Ⅰと同じであるが、あわせて倫理面も含め、より一層臨床家としての資質の向上に努める。

[履修の条件]
本大学院臨床心理学専攻に正規に在籍している学生のみが履修できる。
臨床心理学専攻2年生の必修科目である。
2年前期に「臨床心理実習Ⅰ」を修了することが履修の条件である。

[講義概要]
臨床心理実習Ⅰに続き、学内付属機関（学内実習）および指定の実習先機関（学外実習）で実習を行う。学内実習では、患者やクライエントに対してインテーク面接、心理面接、各種心理査定を行い、さらには継続的な面接を担当する。担当した面接について、逐語録記録や面接記録を作成し、定期的に臨床心理士の資格を有するスーパーヴァイザーからスーパーヴィジョンを受ける。
毎週第4講時に学生自身が担当した事例に関して、ケースレポートにまとめ、ケースカンファレンスにて教員や院生の助言を受け、力量を高める機会とする。

■授業計画
第1回　ケースカンファレンス①
　　院生自身が担当した事例に関してケースレポートにまとめ発表し、ケースレポートのまとめ方や発表方法を学ぶ
　　ケースを多角的に検討することで、ケース理解を深める
第2回　ケースカンファレンス②
第3回　ケースカンファレンス③
第4回　ケースカンファレンス④
第5回　ケースカンファレンス⑤
第6回　ケースカンファレンス⑥
第7回　ケースカンファレンス⑦
第8回　ケースカンファレンス⑧
第9回　ケースカンファレンス⑨
第10回　ケースカンファレンス⑩
第11回　ケースカンファレンス⑪
第12回　ケースカンファレンス⑫
第13回　ケースカンファレンス⑬
第14回　ケースカンファレンス⑭
第15回　ケースカンファレンス⑮
第16回　ケースカンファレンス⑯
第17回　ケースカンファレンス⑰
　　院生自身が担当した事例に関してケースレポートにまとめ発表し、ケースレポートのまとめ方や発表方法を学ぶ
　　ケースを多角的に検討することで、ケース理解を深める
第18回　ケースカンファレンス⑱
第19回　ケースカンファレンス⑲
第20回　ケースカンファレンス⑳
第21回　ケースカンファレンス㉑
第22回　ケースカンファレンス㉒
第23回　ケースカンファレンス㉓
第24回　ケースカンファレンス㉔
第25回　ケースカンファレンス㉕
第26回　ケースカンファレンス㉖
第27回　ケースカンファレンス㉗
第28回　ケースカンファレンス㉘
第29回　ケースカンファレンス㉙
第30回　ケースカンファレンス㉚
第31回　ケースカンファレンス㉛
第32回　ケースカンファレンスのまとめ

[成績評価]
試験（0%）、レポート（30%）、小テスト（0%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（50%）

[成績評価（備考）]
学内および学外実習の評価・実習記録・ケースカンファレンスにおける事例報告とその考察の内容により総合的に評価する。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
学内、学外実習およびケースカンファレンスについて、不足している知識を随時文献や専門書において復習することが望ましい。
ケースカンファレンス参加後、毎回その感想を発表者に提出する。

[試験・レポート等のフィードバック]
毎回提出する実習記録については実習先担当教員および実習先スーパーヴァイザーによるフィードバックを行う。
グループスーパーヴィジョンおよびケースカンファレンスでの発表については、授業内で教員が適宜コメントを行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な、「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

[テキスト]
特にない。
実習やカンファレンスに有用な文献やテキストは、適宜紹介する。

[参考文献]
鑪　幹八郎、名島潤慈「新版心理臨床家の手引き」誠信書房 3,800円

特別研究 A（臨床心理援助方法研究）

4単位：通年	1〜2年　必修
加藤　純、谷井　淳一、田副　真美、植松　晃子	

［到達目標］
臨床心理に関する研究課題を設定できるようになる。
設定した研究課題に関する文献研究ができるようになる。
設定した研究課題に関する実証研究ができるようになる。
研究成果を論文にまとめられるようになる。

［履修の条件］
「特別研究」は臨床心理学専攻の必修科目である。特別研究 A または B を選択して、通年4単位を2年間、合計8単位を履修する必要がある。

［講義概要］
大学院での個々の講義や演習および実習を通して学んだ臨床心理の理論と技法を統合するため、また臨床心理援助の対象となる課題に関する理解を深めるために、各自がテーマを定めて研究する。2年間を通じて、修士論文作成のための指導を行う（特別研究 A・B 共通）。
新入生に関しては各自の研究したいテーマや研究方法を考慮して指導担当教員の希望調査を提出する。希望調査を踏まえてゼミ配属が決定される。この後は、担当教員ごとにゼミ形式の授業が実施される。また、1年次に1回、2年次に2回の中間発表を行う。
ゼミでは、各自の進度に合わせて、関心のあるテーマの選定、研究課題としての具体化、文献研究の報告、量的研究方法や質的研究方法の紹介、研究計画書の作成、調査紙の作成、面接調査の練習、研究倫理委員会への提出書類作成、収集したデータの整理と報告、データの分析・考察などを進めていく。

■授業計画
第1回　オリエンテーション。特別研究の概要。各ゼミの紹介。
　　1〜2年生の懇談。
第2回　各ゼミでのグループ形成。関心テーマの紹介。
　　2年春休み中の研究活動の報告。
第3回　1年関心テーマの明確化。
　　2年実証研究実施状況の報告。
第4回　1年文献検索の報告。
　　2年データ分析の方針検討。
第5回　1年文献調査の報告。
　　2年中間報告発表資料の検討。
第6回　1年文献調査の報告。
　　2年中間報告発表資料の最終確認。
第7回　2年中間報告（2年次第1回=通算第2回）
第8回　1年リサーチ・クエスチョンの検討。
　　2年中間発表に基づくデータ分析方針の再検討。
第9回　1年研究倫理に関する説明。
　　2年データ分析。
第10回　1年研究方法の検討。
　　2年データ分析。
第11回　1年質問紙またはインタビューガイドの作成・検討。
　　2年データ分析。
第12回　1年調査対象者の検討。
　　2年データ分析。
第13回　1年質問紙などの作成・検討。
　　2年データ分析。
第14回　1年質問紙などの作成・検討。
　　2年データ分析。
第15回　夏休み中の研究活動の計画。
第16回　1年「研究倫理委員会申請書」等の検討。
　　2年分析結果に基づく仮説の考察。
第17回　1年「研究計画書」最終確認。
　　2年分析結果に基づく仮説の考察。
第18回　中間発表（1年次第1回=通算第1回）
第19回　1年「研究倫理審査申請書」等の修正。
　　2年「中間発表資料」最終確認。
第20回　中間発表（2年次第2回=通算第3回）
第21回　1年「研究倫理審査申請書」最終確認。
　　2年中間発表に基づく結果と考察の再検討。
第22回　1年実証研究の準備（面接調査の練習など）。
　　2年先行研究と関連づけた考察。
第23回　1年実証研究の準備（面接調査の練習など）。
　　2年先行研究と関連づけた考察。
第24回　1年データ分析の練習。
　　2年各自の研究の臨床心理的意義。
第25回　1年実証研究開始、データ分析の練習。
　　2年各自の研究の限界と今後の課題。
第26回　1年実証研究実施状況の報告。
　　2年修士論文最終稿ゼミ内で締め切り。
第27回　1年実証研究実施状況の報告。
　　2年修士論文最終稿の修正指示。
第28回　1年実証研究実施状況の報告。
　　2年修士論文最終稿の修正確認。
第29回　1年実証研究実施状況の報告。
　　2年修士論文提出原稿の確認。
第30回　1年春休み中の研究活動の計画。
　　2年最終発表・口述試験の準備。
第31回　2年最終発表会。
第32回　2年口述試験。

［成績評価］
試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（70%）

［成績評価（備考）］
授業への参加状況および研究への取り組み、中間発表、その他の課題、研究成果などにより総合的に評価する。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
各自が研究課題を設定して文献研究・実証研究・論文執筆を進める。研究を進める際に必要となる研究計画書（中間発表資料を兼ねる）、研究倫理審査申請書、説明書や同意書などを作成する。
本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）が必要です。合計30回の授業で120時間となります。

［試験・レポート等のフィードバック］
毎回の授業で、研究の進捗状況と内容について院生各自からの報告を受け、院生同士で意見交換し、指導教員からコメントし

ます。
研究計画書、研究倫理審査申請書、説明書・同意書、最終発表会配布資料など、院生が作成した原稿をゼミで検討し、必要に応じて面談またはメールなどで個別に修正方針を伝えます。
中間発表会に院生と教員が全員参加し質疑応答をする他、発表会後に個別にも助言をします。
提出された修士論文に対し、口述試験の際に主査・副査から評価を伝え、修正箇所を指示します。評価表の自由記述部分を渡します。最終発表会に出席した教員も質疑応答に参加します。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。

[テキスト]
特に定めない。

[参考文献]
研究内容に関する文献は各自が研究テーマに合わせて収集する。実証研究の方法やデータ分析に関する文献は各自の研究方法に合わせて収集する。論文の書き方に関して自分に合った文献を見つけて手許において参照することを勧める。

特別研究 B（キリスト教と臨床心理学）

4単位：通年	1〜2年　必修
ジェームズ　サック	

[到達目標]
キリスト教を基礎におく臨床心理学は、その目標とアプローチ方法において、一般臨床心理学と多くの共通点を持つが、大きな違いは前者が心理学の背景に聖書の神の存在を認め、キリストの福音を基礎とする点である。人間の魂のケア、すなわち、癒しの領域に関わるキリスト教的アプローチを、神無き現代社会の深刻な諸問題にどのように対応させていくことができるか。そのことを学ぶことが本研究の中心的課題である。宗教と社会福祉と心理学が重なる領域にある臨床心理学を模索する。信仰をもっている人も、持たない人も受講できる。

[履修の条件]
キリスト教と臨床心理学の分野で修士論文を書く人・書いている人のための特別研究コース（ゼミ）です。本大学院臨床心理学専攻在学中の院生のみ受講できる。

[講義概要]
下記の領域が研究対象となりうる：
1. 死生学と臨床心理学・グリーフ
2. 魂のケアと臨床心理学
3. キリスト教と臨床心理学：その接点について
4. 人間の生と死の問題：生きる意味について
5. スピリチュアリティについて
6. ジェーンダー・LGBT

■授業計画
第1回　オリエンテーション
　　1）授業の目的
　　2）1〜2年生の懇談
第2回　グループ形成、関心テーマを紹介
　　研究活動の報告（M2）
第3回　テーマを明確化（M1）
　　修士論文指導（M2）
第4回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第5回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第6回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第7回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第8回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第9回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第10回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第11回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第12回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第13回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第14回　修士論文研究課題を考える（M1）
　　修士論文指導（M2）
第15回　まとめ
第16回　研究課題の発表とディスカッション
第17回　研究課題の発表とディスカッション
第18回　研究課題の発表とディスカッション
第19回　研究課題の発表とディスカッション
第20回　研究課題の発表とディスカッション
第21回　研究課題の発表とディスカッション
第22回　研究課題の発表とディスカッション
第23回　研究課題の発表とディスカッション
第24回　研究課題の発表とディスカッション
第25回　研究課題の発表とディスカッション
第26回　研究課題の発表とディスカッション
第27回　研究課題の発表とディスカッション
第28回　研究課題の発表とディスカッション
第29回　研究課題の発表とディスカッション
第30回　研究課題の発表とディスカッション
第31回　研究課題の発表とディスカッション
第32回　研究課題の発表とディスカッション

[成績評価]
試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（50%）

[成績評価（備考）]
授業への参加状況および研究への取り組み、中間発表、その他の課題、研究成果などにより総合的に評価する。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
特別研究Ｂでは各授業回に4時間の準備学習を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。配布された資料を読む。

[試験・レポート等のフィードバック]
毎回の授業で、研究の進捗状況と内容について院生各自からの報告を受け、院生同士で意見交換し、指導教員からコメントします。
研究計画書、研究倫理審査申請書、説明書・同意書、最終発表会配布資料など、院生が作成した原稿をゼミで検討し、必要に応じて面談またはメールなどで個別に修正方針を伝えます。
中間発表会に院生と教員が全員参加し質疑応答をする他、発表会後に個別にも助言をします。
提出された修士論文に対し、口述試験の際に主査・副査から評価を伝え、修正箇所を指示します。評価表の自由記述部分を渡します。最終発表会に出席した教員も質疑応答に参加します。

[ディプロマポリシーとの関連性]
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。

[テキスト]
特に決めない

[参考文献]
研究課題をすすめる過程で、必要に応じて紹介します。

心理学研究法特論

2単位：前期	1・2年
北村　英哉	

[到達目標]
心理学のさまざまな研究法を専門的に理解し、自分の研究計画に役立てられるようにすることを到達目標とする。

[履修の条件]
特になし。心理学系の学部卒業でない者も十分理解できるように講義を行う。

[講義概要]
心理学の研究を一つの学問レベルで提示するには、結論の妥当さを保証する「研究方法」が必要になる。この講義では、心理学の方法論を学び、自らの研究にいかにそれを適用していくかを考え、実践していけるようになることをねらいとする。また、調査法、実験法、観察法、面接法など量的研究、質的研究のさまざまな方法の利点と欠点を知り、研究テーマや目的との整合性が考えられるように理解を深めていく。必要な範囲の統計的な説明も若干加えるつもりである。主として板書によって説明するが時にパワーポイントを用いることがある。授業のなかでも随時質問を受け付け、理解をより確実にするように配慮する。

■授業計画
第1回　心理学とその方法。科学的な実証とは。
第2回　調査法とその留意点。
第3回　尺度構成の実際1：尺度のつくり方
第4回　尺度構成の実際2：項目の構成
第5回　尺度構成の実際3：項目分析
第6回　尺度の信頼性と妥当性
第7回　相関研究と因果の研究：調査と因果
第8回　調査データと多変量解析
第9回　実験法の留意点
第10回　実験の論理と実際
第11回　面接法と観察法。量的データと質的データ。
第12回　フィールドワーク
第13回　ライフストーリーインタビュー
第14回　グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）
第15回　各研究での方法の構成の仕方について。
第16回　レポート

[成績評価]
試験（0%）、レポート（80%）、小テスト（0%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（0%）

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
毎週平均して予習復習に4時間を割き、半期全体で60時間の準備学習を要する。特に関心のある研究法については、紹介した文献で詳細を学習してよく理解を深めることを求む。

[試験・レポート等のフィードバック]
課題提出については個々にコメントをつける他、全体に対して回答をフィードバックすることもある。レポートについては参照できる情報を用意する。

[ディプロマポリシーとの関連性]
広い学識を身につけ、高度な専門的知識を身につける基本、土台となる方法論上の高度な専門的知識を学び、専門家としても自発的研究を維持することが可能な能力を身につける。

[テキスト]
村井潤一郎編著2012『Progress & Application 2 心理学研究法』サイエンス社　2200円+税

[参考文献]
アン・サール著（宮本聡介・渡邊真由美訳）2005『心理学研究法入門』新曜社。高野陽太郎・岡隆（編）2004『心理学研究法−心を見つめる科学のまなざし』有斐閣。W.J. レイ　2003『エンサイクロペディア心理学研究方法論』北大路書房。杉山憲司・堀毛一也（編著）1999『性格研究の技法』福村出版。下山晴彦（編著）2000『臨床心理学研究の技法』福村出版。保坂亨他（編著）『心理学マニュアル　面接法』鎌原雅彦他（編著）『心理学マニュアル　質問紙法』中澤潤他（編著）『心理学マニュアル　観察法』北村英哉『なぜ心理学をするのか』以上4冊、北大路書房。

心理統計法特論 I

2単位：前期	1・2年
谷井　淳一	

[到達目標]
①統計的検定の考え方を理解する。
②t 検定など代表的な検定方法を習得する。
③質問紙調査の方法を実習し理解する。

[履修の条件]
心理学を学部で学んでいない人もいるので、かなり、初歩的な内容から始めて、論文が書けるレベルまでを講義する。学部で習っていない人はあまり毛嫌いせずに体験的に学びを深めていってほしい。

[講義概要]
記述統計から始めて、推測統計のうち、t 検定までを講義する。続いて、質問紙調査の方法について体験的に学んでいく。
グループで実際に調査票を作成し、調査実施する。得られたデータをパソコンを用いて入力しデータをチェックする方法を学ぶ。そののち、因子分析を用いて、項目内容を精選する。これら一連の流れを体験的に実習する。この授業を通じて言葉のセンスを磨いてほしい、特に、自分が作成した項目が、調査協力者にどのように受け取られ反応が返ってくるかを体得することが大切である。質問紙に記入している調査対象者がどのように応答しているかを想像できるようにデータを読み取る力をつけてほしい。質問紙を作るまでのプロセスは質的研究に近いものなので、自分は質的な研究をしたいと考えている人も、質問紙作成の体験は是非真剣に取り組んでほしい。

■授業計画
第1回　記述統計と推測統計
第2回　帰無仮説と対立仮説
第3回　z を用いた検定と t 検定
第4回　質問紙尺度を用いた研究事例
第5回　因子分析結果の見方
第6回　尺度の水準とワーディング
第7回　質問紙調査票の作成
第8回　調査の実施
第9回　データ入力の方法
第10回　データチェックの方法
第11回　因子分析結果の整理
第12回　信頼性係数の算出
第13回　下位尺度別に男女別の平均値・標準偏差を算出し t 検定の実施
第14回　レポートの作成
第15回　レポートの作成2
第16回　レポートの作成3

[成績評価]
試験（0%）、レポート（100%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（0%）

[成績評価（備考）]
質問紙調査実施から分析するまで、グループ作業として実施したことをレポートしてもらう。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
復習を中心に定着を図ることが望まれる。1回の授業について4時間の復習時間が必要であり、15回の授業で合計60時間の復習時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
各段階ごとに進行具合をチェックし、それに対して、フィードバックを行ってすすめていく。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目はディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な学識を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につける」ことを目標とする。特に研究を企画・実施・分析するための方法の習得を目的とする。

[テキスト]
「新版要説心理統計法」山上暁・倉智佐一著　北大路書房
（この教科書でなくてもいいが、何か一つ統計の教科書を持っていてほしい）

[参考文献]
「社会心理学研究入門」末永俊郎編　東京大学出版会
「SPSS と Amos による心理・調査データ解析」小塩真司著　東京書籍

心理統計法特論 II

2単位：後期	1・2年
谷井　淳一	

[到達目標]
①多変量解析の色々を理解し、適切に分析方法を選択できる力をつけること。
②各自の研究目的に従って、どのような分析方法が望ましいかを判断し、適切な研究計画をたてる力を育成する。

[履修の条件]
心理統計法特論 I を履修ずみであることが必要。ただし、学部段階で心理統計法および質問紙法を履修し理解している場合は、後期から受講してもらってもよい。

[講義概要]
多変量解析の代表として重回帰分析について詳しく解説する。さらに、主成分分析、因子分析、判別分析、共分散構造分析などについてその違いを理解できるよう指導する。
最後に、分散分析、とくに主効果や交互作用について詳しく学ぶ。

■授業計画
第1回　多変量解析について
第2回　重回帰分析をパソコンでやってみる
第3回　重回帰分析の理論的理解
第4回　色々な分析のパスモデルとしての表現

第5回　最小二乗基準と微分
第6回　共分散構造解析
第7回　主成分分析と固有値
第8回　因子分析と回転
第9回　判別分析とクラスター分析
第10回　ロジスティック回帰分析
第11回　1要因分散分析と多重比較
第12回　2要因分散分析と交互作用
第13回　下位検定のいろいろ
第14回　3要因分散分析
第15回　マンホイットニーのU検定
第16回　まとめ

[成績評価]
試験(0%)、レポート(100%)、小テスト(0%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(0%)

[成績評価(備考)]
統計法は結局実際に自分で調査して自分のデータをとって分析して初めて理解が深まる。そのための体験としてこの授業における実習が大切である。レポートはその体験の感想程度のものでよい。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
確実に復習して知識の定着をはかってほしい。1回の授業につき、4時間の復習時間が必要であり、合計60時間の復習が必要である。

[試験・レポート等のフィードバック]
各段階でチェックをしながら実施する。授業中に、必要に応じてフィードバックを行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることを目的にする。研究を企画・実施・分析に必要な方法について学習する。

[テキスト]
プリントを用意する。

[参考文献]
「心理統計学の基礎−統合的理解のために」南風原朝和著　有斐閣アルマ
「心理・教育のための多変量解析法入門−基礎編＆事例編」渡辺洋著　福村出版

臨床心理学研究法特論

2単位：集中	1・2年
沖潮　満里子	

[到達目標]
①質的研究法の基本的な考え方、各手法に関する基礎的な知識を得る。
②質的データの収集および分析に取り組み、質的研究法について実践的に理解する。

[履修の条件]
出席が全体の3分の2に満たない場合は、単位認定の対象とはしない。

[講義概要]
近年注目を集めている質的研究法について学習し、自らの研究基盤をつくることを本講義の目的とする。授業では、講義だけでなく、半数以上の回で実際の研究例を読み進めることで理解を深めていく。また、自分自身でもインタビューや観察を通じて、データ収集とその分析に取り組み、実践的に学んでいく。

■授業計画
第1回　イントロダクション
第2回　質的研究とは
第3回　インタビューの基礎
第4回　質的研究を読む(1)
第5回　インタビューガイドの作成
第6回　トランスクリプトの作成
第7回　質的研究を読む(2)
第8回　質的データの読み
第9回　質的分析の様々な方法
第10回　質的研究を読む(3)
第11回　質的分析の実習(1)
第12回　質的分析の実習(2)
第13回　質的研究の質
第14回　成果発表
第15回　全体総括
第16回　なし

[成績評価]
試験(0%)、レポート(60%)、小テスト(0%)、課題提出(20%)、その他の評価方法(20%)

[成績評価(備考)]
「その他の評価方法」は授業内のプレゼンテーションによる。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
予習として、前授業の学習内容を振り返ってから授業に参加すること。また、論文を読む回には当該論文を読んだ上で参加すること。
提示された課題に取り組む上で、配布資料及び講義概要の復習は必須となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
レポートはコメントを加えた上で返却する。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

[テキスト]
特に指定しない。講義用プリントを配布する。

［参考文献］

①能智正博(2011)『質的研究法』東京大学出版会
②スタイナー・クヴァール(2016)『質的研究のための「インター・ビュー」』新曜社
③伊藤哲司・呉宣児・沖潮満里子(編)『アジアの質的心理学』ナカニシヤ出版(2018年3月末刊行予定)

発達心理学特論

2単位：後期	1・2年
高城　絵里子	

［到達目標］

①人間の発達・成長についての心理機制を理解する。
②発達心理学的研究法と論文のスタイルを学び、自身の修士研究に役立てる。
③生涯発達の観点から人生の各段階の発達課題と心理的問題を理解し、自身の臨床実践や支援の可能性について考察を深める。

［履修の条件］

発表と討論を中心に進める授業であるため、履修者の積極的な参加と発言を期待する。自らの修士研究や臨床実践と発達心理学との関連を考察し、研究・実践に新たな展望を得る意欲のある学生を望む。

［講義概要］

テキスト講読では、ピアジェの理論とその後の発達心理学研究の動向を中心に扱う。各章ごとに担当者を決めて発表、内容についての討論、ビデオ学習および教員による補足講義を行う。発表者にはテキストの担当部分に加え、関連する理論や研究を調査した内容を含めた資料を作成すること、授業内で発表および討論の進行を務めることが求められる。書籍講読に続いて、「発達心理学研究」から1本ずつ研究論文を発表し、研究手法や論文のスタイルについて議論していきたい。

■授業計画

第1回　ガイダンス
　　修士研究と発達心理学との関連
第2回　文献購読発表①
　　発達心理学の歴史と代表的な研究者の概観
第3回　文献講読発表②
　　胎児期・新生児期を対象とした発達心理学理論、研究の概観
第4回　文献講読発表③
　　乳児期の知覚および運動発達
第5回　文献講読発表④
　　乳児期の認知的発達と愛着の形成
　　ピアジェの認知発達段階理論、ボウルビィの愛着理論を中心として
第6回　文献講読発表⑤
　　幼児期の言語発達と描画
　　ピアジェとヴィゴツキーの理論を中心として
第7回　文献講読発表⑥
　　幼児期の認知的発達
　　ピアジェの認知発達段階理論とその後の研究における反論
第8回　文献講読発表⑦
　　児童期の認知的発達
　　ピアジェの認知発達段階理論を中心として
第9回　文献講読発表⑧
　　児童期の道徳観と学校教育の影響
第10回　文献講読発表⑨
　　思春期、青年期の発達
　　ピアジェによる説明と、フロイト派における考え方を中心に
第11回　文献講読発表⑩
　　成人期・中年期・老年期の発達
　　生涯発達の視点とエリクソンの心理社会的発達理論を中心に
第12回　研究論文発表①
　　「発達心理学研究」に掲載されている論文を講読し、その研究目的、方法、結果を学ぶことによって、自身の修士研究とのかかわりを考察する。
第13回　研究論文発表②
　　「発達心理学研究」に掲載されている論文を講読し、その研究目的、方法、結果を学ぶことによって、自身の修士研究とのかかわりを考察する。
第14回　研究論文発表③
　　発達心理学研究」に掲載されている論文を講読し、その研究目的、方法、結果を学ぶことによって、自身の修士研究とのかかわりを考察する。
第15回　まとめ①
　　これまでに学んだ発達段階の理論を一覧としてまとめることによって、人間の発達における理論間の関係を概観する。
第16回　まとめ②
　　各自の研究の展望、臨床実践について最終討論を行う

［成績評価］

試験(0%)、レポート(0%)、小テスト(0%)、課題提出(50%)、その他の評価方法(50%)

［成績評価(備考)］

課題提出とは、発表原稿とフィードバック用紙の提出を指す。
その他とは、授業への出席、発表の内容と授業における討論への参加態度を指す。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］

本科目では各授業回に4時間の準備学習を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。予習では、発達心理学の代表的な理論について各自あらかじめ復習しておくこと、また文献を熟読し疑問や考察を整理しておくこと、文献講読・論文講読発表担当部分についてレジュメ作成とプレゼンテーションの練習を十分にしておくことを求める。
復習として各授業での討論を踏まえた考察を行うことを勧める。

［試験・レポート等のフィードバック］

文献購読発表課題については、授業内で口頭でコメントを行う。

［ ディプロマポリシーとの関連性 ］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な、「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

［ テキスト ］
「発達心理学の基本を学ぶ−人間発達の生物学的・文化的基盤」George Butterworth, Margaret Harris（原著）, 村井潤一, 神土陽子, 小山正, 松下淑（翻訳）ミネルヴァ書房

［ 参考文献 ］
「心理臨床学研究」「発達心理学研究」諸雑誌

教育心理学特論

2単位：後期	1・2年
北村　英哉	

［ 到達目標 ］
臨床心理学、特に学校現場での心理臨床に役立つ教育心理学の基本概念と新たな動向を学習、修得し、その教育現場における有用性について心理学的立場から説明ができるようになること、ならびに教育事象に関わる児童・生徒の心理学的特質、教育現場の集団的ダイナミックスを社会・文化と関連づけて知ることを到達目標とする。

［ 履修の条件 ］
特になし。初心者にもわかりやすいように講義する。
2017年度以前入学者は、単位取得できません。

［ 講義概要 ］
教育については、社会のなかで多くのことが多様な立場から語られている。しかし、そのほとんどは実証的なデータに基盤を置かない自身の個人的経験に過ぎない想い出とも言える妥当性を欠いた言述である。そもそも学校や社会について実証的、科学的にものを考えるとはどういったことであるのかを十分知り、心得た上で、教育事象に関わって戦後教育心理学が脈々と積み上げてきた科学的知識を習得し、現実に即した立ち位置から学校現場に関わることはきわめて重要であろう。大切なのは個人的な経験などは取っ払い思い込みから脱したまなざしで現場と関わることである。教育を取り巻く状況はめまぐるしく変化し、自身の学校体験などを過度に参照することは危険でさえある。また人間の発達を知り、その文化・社会との相互作用を知れば、自分自身とは異なる時代、異なる社会状況のなかで育ちつつある児童・生徒がいかに自分とは異なる感性と考え方を持つものであるか目を開かれるだろう。教育に関わり、生徒に関わるものはこうした文化・社会の影響の実際に対してきわめてセンシティブな感性と理論的な分厚いバックグラウンドを持っていなければならない。
また、心理学は分野によってさまざまではあるが、理論と実証の緊密な関係が特徴である。さまざまな理論を学ぶことによって、調査を行ったり、フィールドに入って研究や臨床実践を行うに際し、「理論的感受性」は非常に大切であり、そうした準備を本講義は与える。修士論文の研究に際しても研究者は自らの理論的装備をもった上で研究にかからないと現象に対して素手で格闘することになってしまう。人間についての現象、行動を一歩離れたところから概念化する作業に慣れておくことは重要であり、心理学は人間関係の学問であり、このような概念を多く提供している。その知見は学校生活や日常生活で行われている人間関係から得られているが、考え方を知ることで、概念の切り出し方や目のつけ方などが自ずと学習され、視点が鍛えられる。
また、社会・文化と発達・教育の関係を理論的にも深く知ることによって、異なる時代を生きる児童・生徒への深い理解や温かい共感的まなざしを獲得することもできる。自分と異なることを否定するのではなく、いかに人が成長し、生きていくかの理論と法則を客観的に知り、心得ておくことにより、学校臨床のあり方は大きな影響を受けるであろう。また、すべてを親子関係や家族関係に還元したり、人格障害や発達障害という個人差だけに着目するのではなく、幅広く柔軟な視野を養うことによって、現場や当事者に害をなし、邪魔者扱いされる誤った臨床家となることを防いでくれる。理論を知ることは、自らの研究態度や臨床態度についても、いっそう公平な向き合い方、虚心な理解の仕方を形成していく役に立つだろう。講義は主に板書で行うが、ときにパワーポイントを用いる。大学院の少人数のクラスであるから授業中にも随時質問を受け付け対話的に進めていく。

■授業計画
第1回　教育と心理学、人間。教育とは何か。
第2回　発達の法則と人間。
第3回　遺伝と環境、その正しい理解。
第4回　知能と学業、学習行動。
第5回　認知と学習、記憶。
第6回　学習方略。正しい学習の仕方とは。
第7回　学習と動機づけ。目標の達成。
第8回　学習と動機づけ。原因の推論、感情との関わり。
第9回　がんばり、粘り強さ、自己制御。
第10回　文化と学習。何のための学習か。
第11回　どうしたらほめられるのか、叱られるのか、制御焦点の問題。
第12回　教室の暗黙裡のルール。
第13回　市民教育とものの考え方。
第14回　道徳の発達。
第15回　教師−生徒関係。クラスの集団関係。グループダイナミックス。
第16回　レポート

［ 成績評価 ］
試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（10%）

［ 成績評価（備考） ］
授業中における質問、理解を深める発言、教員の発問に対する応答など。

［ 予習・復習の内容及びそれに必要な時間 ］
本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。特に関心のあるテーマはそれ以上に積極的に参考文献、授業で紹介する文献で学習して欲しい。

[試験・レポート等のフィードバック]
課題提出については個々にコメントを付けるほかに全体に役立つ場合、全体へのフィードバックとして補足説明をすることがある。レポートについては事後に参照できるウェブサイトでフィードバックを与える。

[ディプロマポリシーとの関連性]
広い学識と高度な専門的知識を与える。学校臨床においては、生徒、クライエントの課題を査定・理解し、適切に目標を設定し、目標に向けて臨床的支援を行う理論的基盤や人間的基盤を培うことも含む。

[テキスト]
特に指定しない。

[参考文献]
鎌原雅彦・竹綱誠一郎2015『やさしい教育心理学』有斐閣（¥2,052）　北村英哉・大坪庸介2012『進化と感情から解き明かす社会心理学』有斐閣（¥1,995）　中澤潤編2008『よくわかる教育心理学』ミネルヴァ書房　北村英哉・木村晴（編）2006『感情研究の新展開』ナカニシヤ出版　下山晴彦編1998『教育心理学2発達と臨床援助の心理学』東大出版会　シャンク&ジマーマン2009『自己調整学習と動機づけ』北大路書房。

司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開

2単位：集中	1・2年
室城　隆之	

[到達目標]
1. 司法・犯罪分野の心理学の研究対象及び研究方法を学ぶ。
2. 司法・犯罪分野に関する理論的枠組みを身につける。
3. 司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践について理解する。

[履修の条件]
テキストの該当箇所を事前に読んで，積極的に講義に参加すること。
2017年度以前入学者は、単位取得できません。

[講義概要]
最初に，司法・犯罪分野に関する心理学の研究対象と研究方法について紹介した後，司法・犯罪分野に関する心理学の理論的枠組みについて学習する。次に，司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践について，各実践領域別に学習する。続いて，司法・犯罪分野における心理的援助に関して，アセスメントと心理教育の技法について学ぶ。最後に，司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践の課題と展望について検討する。基本的にパワーポイントの資料を用いた講義形式の授業になるが，視聴覚教材の活用や，グループディスカッションなども行う予定である。

■授業計画
第1回　司法・犯罪分野の心理学の研究対象と研究方法
第2回　司法・犯罪分野の心理学の理論的枠組み(1)生物学的理論
第3回　司法・犯罪分野の心理学の理論的枠組み(2)社会学的理論
第4回　司法・犯罪分野の心理学の理論的枠組み(3)心理学的理論
第5回　司法・犯罪分野の心理学の理論的枠組み(4)新しい理論枠組み
　　小テストと解説
第6回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(1)警察と犯罪捜査
第7回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(2)児童相談所
第8回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(3)家庭裁判所の少年事件
第9回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(4)家庭裁判所の家事事件
第10回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(5)少年鑑別所と少年院
　　小テストと解説
第11回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(6)刑務所と保護観察
第12回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践(7)犯罪被害者支援
第13回　非行少年・犯罪者のアセスメント
第14回　非行少年・犯罪者の心理教育
第15回　司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践の課題と展望
　　小テストと解説

[成績評価]
試験(0%)、レポート(0%)、小テスト(100%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(0%)

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
本科目では，1コマの講義について4時間の準備学習（予習・復習）を必要とする。合計15コマの講義で60時間となる。予習においては，テキストの該当箇所を読んでおくこと。復讐においては，講義資料，テキスト，必要に応じて参考文献を読んで，理解を定着させること。

[試験・レポート等のフィードバック]
講義内小テストの解答・解説は，各テスト終了後に実施する。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は，ディプロマポリシーに定める「広い学識と，高度な専門的知識や技術を備え，専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に，臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門家としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理や法の理解と遵守」「クライエントの課題の査定・理解と目標に向けた臨床的支援を行う能力」「臨床心理の知見を地域社会に還元し，貢献する能力」の修得を目指す。

[テキスト]
・河野荘子・岡本英生編著『コンパクト犯罪心理学』北大路書房　1,944円

・大渕憲一著『犯罪心理学−犯罪の原因をどこに求めるのか』培風館　2,592円
・藤岡淳子編『犯罪・非行の心理学』有斐閣　2,376円
・その他，必要に応じてプリントを配布する。

［参考文献］
講義内で指定する。

家族心理学特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）

2単位：後期	1・2年
福山　和女	

［到達目標］
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
家族関係・集団、地域社会における心理支援の各論理と実践を学習し、それに基づくスーパービジョンの方法と技術をも習得する。

［履修の条件］
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
履修者の目標設定に基づく。参加型形式をとる。履修者が目標達成に積極的に取り組むことを要請する。
スーパービジョン体験が中心である。

［講義概要］
家族関係、集団の関係性に焦点を当てた心理支援の理論と方法に焦点を当て、理論の適用について考察し、また、各理論に基づくスーパービジョンの理論と方法を習得し、理論と平行して実践的な研究を進めていく。また、地域社会や集団・組織に働きかける心理学的援助に関する理論と方法について研究を進める。治療構造の計画を立てるなど、心理に関する相談、助言、指導などに、習得した理論や方法を適用し、応用力をつける。専門家にとっては、自己の分析、自己評価、自己覚知を通して訓練することが必須条件である。本講義では、レーニング・プロセスにスーパービジョンの概念と方法を適用し、心理療法家の養成プロセスを段階的に体験する学習方法を採用する。

■授業計画
第1回　スーパービジョンの歴史的変遷と日本におけるあゆみ
第2回　スーパービジョンの必要性と機能
第3回　組織、職位、職種からのスーパービジョンの貢献
第4回　心理療法面接の導入期
第5回　介入開始期
第6回　問題の変革期への働きかけ
第7回　心理支援の家族関係に焦点を当てた理論と方法ー開始期を中心に
第8回　心理支援の集団関係に焦点を当てた理論と方法ー安定期を中心に
第9回　心理支援の地域の関係に焦点を当てた理論と方法ー終結期を中心に
第10回　心理的社会的アプローチによるスーパービジョン
第11回　家族システムズ論によるスーパービジョン
第12回　組織管理論と心理支援との関係に焦点をあて、スーパービジョンに応用する。
第13回　2者関係に焦点を当てた心理支援と個人スーパービジョンとの関係
第14回　世代間スーパービジョン
第15回　スーパービジョンの実施上の留意点
第16回　まとめ−実践と理論との関連性

［成績評価］
試験（20％）、レポート（30％）、小テスト（20％）、課題提出（30％）、その他の評価方法（0％）

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
テキストや参考文献から、該当する理論や技術について予習・復習することを薦める
各科目の授業に本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
レポートなどで、各授業のフィードバックをして、内容の積み上げを行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。研究倫理の順守、心理支援や相談の対象者、集団、組織、地域などの尊厳の保持を原則として、専門家としての姿勢を保持しながら、研究に携わることを求める。

［テキスト］
福山和女編著（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房　2,800円+税

［参考文献］
中村伸一他『説き明かし・私の家族面接初回面接の実際』［DVD］2010　中島映像　46,000円

［備考］
出席日数、レポート提出など総合的評価である。
参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する

精神医学特論

2単位：前期	1・2年
倉本　英彦	

［到達目標］
心理職・福祉職・医療職は協働することが多く、共通の専門的知識を有することが必要である。そのもっとも基礎となる知識体系である精神医学を学び、身体、精神、社会と文化という側面からの多次元的なアプローチができるようにする。

［履修の条件］
臨床心理学専攻生・社会福祉学専攻生で、履修登録を行った者。

[講義概要]
精神医学とは何だろうか?臨床心理学や社会福祉学との関連から位置付けてみよう。精神医学の方法論は?生物、精神、心理、社会的次元から探ってみよう。精神科医療の現状とは?日本と世界の精神科医療の実際を知ろう。精神障害とは?異常と正常、病気と健康、精神の病とは何か。精神障害の歴史や概念、そして原因、症状、疫学、診断、治療、予後、リハビリテーションなど、個々の疾患の特徴を体系的に学ぼう。授業形態については、基本的に講義形式になるが、わかりやすいようにDVD映像を使用したり、トピックに沿った発表形式で行うことにする

■授業計画

第1回　オリエンテーション
　　精神医学入門
第2回　異常と正常、病気と健康、素質と環境
第3回　精神症状、状態像、症候群、精神障害の体系、精神疾患概念の歴史
第4回　心因によるもの(1)　心身症
第5回　心因によるもの(2)　神経症とストレス関連障害
第6回　心因によるもの(3)　睡眠・摂食・性関連障害
第7回　内因によるもの(1)　統合失調症
第8回　内因によるもの(2)　気分障害
第9回　器質因によるもの(1)　脳の急性障害
第10回　器質因によるもの(2)　脳の慢性障害
第11回　器質因によるもの(3)　アルコール・薬物関連障害
第12回　児童・青年期精神医学(1)　情緒と行動の問題
第13回　児童・青年期精神医学(2)　発達障害
第14回　性格のかたより
第15回　精神保健福祉法　司法精神医学
第16回　まとめ、試験あるいはレポート

[成績評価]
試験(0%)、レポート(40%)、小テスト(40%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(20%)

[成績評価(備考)]
臨床職に就くものとして適切で積極的な授業へのかかわりも考慮する

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
予習：シラバスに沿った箇所の教科書や文献をあらかじめ読んでおく
復習：講義内容や発表をよく振り返り、ノートにまとめる
本科目では各授業回に4時間の準備学習(予習・復習等)を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
講義内小テストの解答・解説は、テストが実施された当日か次回に行う。
発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目を履修することにより、ディプロマポリシーにある、広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることができる。なお、臨床心理士や公認心理士の資格を取得しようとする者には、「専門職としての使命と社会的責任」「倫理や法令の理解と順守」「クライエントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指す。

[テキスト]
山下格著『精神医学ハンドブック一医学・保健・福祉の基礎知識』日本評論社2,300円

[参考文献]
倉本英彦著『つまずく若者たち一思春期臨床の現場から』日本評論社1,600円
齋藤高雅・高橋正雄編著『中高年の心理臨床』放送大学教育振興会2,100円

[備考]
毎回、テキストと各自用意した本科目専用ノートを持参すること

心身医学特論(保健医療分野に関する理論と支援の展開)

2単位：集中	1・2年
三宅　永	

[科目補足情報]
精神医学を中心にした講義を行うが、その中で、心身医学的な内容や、保健医療分野に関わる公認心理士の実践に関する内容も織り交ぜていきたい。

[到達目標]
①心理臨床を実践する際に必要な、医学的知識を習得する。
②病院の医療チームに参加した際に、チームの一員として力を発揮できるだけの知識や心構えを習得する。
③薬物療法等を通じて、生物学的精神医学や脳科学の知識も深める。

[履修の条件]
本科目を履修する場合は、ごく初歩的な精神医学の基礎知識を知っていることを期待する。特に、臨床心理系の学部卒でない、等の理由で、精神医学の講義を受けた経験がない場合は、下記参考文献1などを読んでおくことをお勧めする。

[講義概要]
医学的観点を欠いた心理臨床は、偏りや誤りを生じやすい。そのため心理臨床を実践する際に、医学の知識は必須といえる。本講義では心理臨床の実践に必要な医学の知識を講義する。
講義にあたっては、できるだけ実際の臨床に即した講義を心がけたい。
心理臨床に携わる上で知っておくべき、薬物療法や脳科学を基盤とする生物学的精神医学の講義の他、講義担当者が専門とする森田療法などの心理療法や、脳波検査、さらには産業精神医学などの講義も行う予定である。

■授業計画

第1回　医学における精神医学と心身医学(背景、歴史)、精神疾患の分類、全人的医療における精神医療
第2回　精神科の診断について(精神症状の捉え方、各種検

査、古典的診断と操作的診断基準など）
第3回　精神科の治療①（薬物療法を中心に）
第4回　精神科の治療②（薬物療法以外の身体療法・精神科リハビリテーション・心理療法）
第5回　精神医学各論（うつ病とその類縁疾患）①
第6回　精神医学各論（うつ病とその類縁疾患）②
第7回　精神医学各論（心的外傷およびストレス因関連障害群：適応障害を中心に）
第8回　精神医学各論（心身症）
第9回　精神医学各論（不安症）
第10回　精神医学各論（強迫症および関連障害群，解離症）
第11回　精神医学各論（統合失調症）
第12回　精神医学各論（神経発達症群）
第13回　精神医学各論（摂食障害、認知症、睡眠覚醒障害）
第14回　精神医学各論（症状精神病，保健医療分野における公認心理士の実践）
第15回　まとめ
第16回　ー

［成績評価］
試験（0%）、レポート（80%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（20%）

［成績評価（備考）］
討議における発言などを通して、本人の理解度を探り参考とする。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
参考文献に目を通しておくことが望ましい。特に参考文献2は、必ずや将来の臨床に役立つ名著である。余裕のある方はぜひ目を通されたい。また、精神科実習をすでに開始している場合は、実習で感じた疑問や感想を自分なりにまとめ、授業内で質問・提案を行ってほしい。

［試験・レポート等のフィードバック］
リアクションペーパーに対するフィードバックを、それ以降の講義内容において行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
「2. 全人的なヒューマン・ケアに必要な高度な専門性」に該当する。この科目を習得することで、将来の臨床活動に必要な知識を身につけることができる。

［テキスト］
教科書については初講時に学生の皆さんのニーズを聞き取って決定したい。

［参考文献］
1. 上島国利監修：やさしくわかる精神医学　ナツメ社　1800円
2. 中井久夫、山口直彦：看護のための精神医学　医学書院　3000円
その他適宜、読むべき文献を配布する。

［備考］
基本的にパワーポイントを用いた講義形式の授業になるが、適宜、事例検討などに関してグループディスカッションを行う。

心理療法特論Ⅰ（交流分析）

2単位：前期	1・2年
白井　幸子	

［到達目標］
「交流分析」はフロイトの精神分析理論を背景にもち、それを具体的で分かりやすい日常語を使って表現した人間の心と行動に関するパーソナリティー理論です。6つの基本理論より成り立っており、これらの基本理論を学ぶことによって客観的な自己理解・他者理解が得られます。さらに、V.Joines、I.Stewart によって創始された「交流分析による人格適応論」も学びます。乳幼児期の親子関係がその後の人格形成、行動様式、適応スタイルにどのような影響を及ぼすかなどについての理解を得ます。自分の適応スタイルを知り、自分とは異なる適応スタイルを持つ人と望ましい関係性を築くことによって人間関係をストレスの少ない、楽しく意味あるものにしたいと願っています。

［履修の条件］
本大学院に正規に在籍している臨床心理学専攻の院生のみが履修できます。

［講義概要］
交流分析は以下の6つの基本理論より成り立っています。
Ⅰ. 交流分析について
1）自我状態の分析
2）やりとりの分析
3）ストロークへの欲求とディスカウント
4）心理的ゲームの分析
5）人生における基本的構え
6）人生脚本の分析
上記の6つの基本理論は1）パーソナリティ理論、2）コミュニケーション理論、3）発達心理学、4）精神病理学などの領域を含み、人間の心と行動を分析します。交流分析の基本理論に基づいて開発されたのが「交流分析による人格適応論」です。望ましい人間関係を築く方法を学びます。
Ⅱ. 交流分析による人格適応論について
1）親の養育スタイルとこどもの人格適応スタイルについて
2）自分の適応スタイルを知る
3）人間関係に人格適応論を用いる

■授業計画
第1回　第1回授業へのオリエンテーション：1）交流分析とは　2）自己紹介3）この授業より望むもの
第2回　自我状態の分析（その1）
「エゴグラム」を通して自己理解をする
第3回　自我状態の分析（その2）
1）自我状態の汚染の問題、2）望ましい自我状態のあり方、3）臨床の現場での応用
第4回　やりとりの分析
（1）やりとり3つのタイプ：1）相補的やりとり、2）交差的やりとり、3）隠されたやりとり
（2）望ましいやりとりのあり方：1）他の人との望ましいや

りとりとは、2）他の人との望ましいやりとりとは
第5回　ストロークへの欲求とディスカント（その1）
　1）ストロークとは
　2）ストローク経済の法則
第6回　ストロークの欲求とディスカウント（その2）
　1）各発達段階に必要なストローク
　2）ストロークの体験学習
第7回　第7回心理的ゲームの分析（その1）
　1）心理的ゲームとは
　2）心理的ゲームの種類
第8回　心理的ゲームの分析（その2）
　1）なぜ心理的ゲームを行うのか
　2）心理的ゲームをやめるには
第9回　人生における基本的構え：1）私もあなたもOK, 2）あなたはOK, 私はOKではない、3）私はOK, あなたはOKではない、4）私もあなたもOKではない。
第10回　人生脚本の分析（その1）
　（1）人生脚本とは
　（2）人生脚本構成要素：1）禁止令、2）拮抗禁止令、3）行動のプログラム
第11回　人生脚本の分析（その2）
　1）自分の脚本テーマを知る
　2）脚本の種類（プロセス脚本）
第12回　「幼児決断」から「再決断」へ
　再決断療法の実際を通して学ぶ
第13回　交流分析による「人格適応論」（その1）
　「人格適応論とは」
　　親の養育スタイルと6つの人格適応タイプ
第14回　交流分析による「人格適応論」（その2）
　1）各適応タイプの特徴
　2）質問紙を用いて自分の適応タイプを知る
第15回　交流分析による「人格適応論」（その3）
　人格適応論を人間関係の向上にどのように役立てるか
第16回　レポート

［成績評価］
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（50%）

［成績評価（備考）］
1）授業への参加度
2）毎回授業内容についての感想を提出する

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
授業前にその日の講義内容をテキストを通して理解しておくと授業が分かりやすく、より興味深いものになるでしょう。「エゴグラム」と「ジョインズによる人格適応質問紙」などは授業前記入しておくとよいでしょう。本科目では、各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
フィードバックについてのディスカッションを次の授業でおこなう。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

［テキスト］
1）白井　幸子。臨床にいかす心理療法.　医学書院、2004.¥2,310
2）必要に応じてプリントを配布します。

［参考文献］
ジョインズ、スチュアート（白井、繁田監訳）。交流分析による人格適応論。誠信書房、2007.¥6,090.
ジョインズ、スチュアート（深沢　道子監訳）TA TODAY 最新交流分析入門、実務教育出版。1991.¥4,500
白井　幸子. 看護にいかす交流分析。医学書院、1983.¥2,310

［備考］
成績評価の「その他」は以下の内容を含みます。
1）体験学習への参加
2）ディスカッションへの参加
3）講義セッションの感想提出

心理療法特論 II（児童臨床心理）

2単位：前期	1・2年
加藤　純	

［到達目標］
1）子どもや家族の視点・感じ方・望みを尊重する姿勢を学ぶ。
2）理論と実践とを結びつけて子どもや家族を援助する力を養う。
3）子どもと面接する際のコミュニケーションの基本技法を身につける。

［履修の条件］
1）臨床心理学専攻の正規の院生を対象とした科目です。本大学院・臨床心理学専攻に正規に在籍している院生のみが履修できます。
2）前提となる科目などは特に定めません。

［講義概要］
事例検討やロールプレイなどを交えて学びます。アクスラインによる遊戯療法、ダギー・センターでのグリーフケア、キム・バーグ等による解決志向アプローチなどを紹介します。参加者の関心や経験に合わせて、内容や進行方法の変更も可能です。

■授業計画
第1回　導入とオリエンテーション。
　a）大人の面接と子どもの面接の違い。
　b）この科目の目標。
　c）授業の進め方。
第2回　言葉を反映する技法（アクスライン）
第3回　遊戯療法の八原則（アクスラインの児童中心療法）
第4回　行動を反映する技法（アクスライン）

第5回　子どもの遊びの比喩的・象徴的な意味
第6回　治療空間が持つ治療的な意味（ドノヴァン、アクスライン）
第7回　遊びを反映する技法（アクスライン）
第8回　遊びへの参加と役割理論（ダギー・センター）
第9回　遊戯療法の様々なアプローチ
第10回　遊戯療法の事例を読む（精神分析、ユング心理学、学習理論の考え方に基づく事例検討）
第11回　親子面接の事例を読む（発達理論と実践を結びつける）
第12回　親子面接の事例を読む（治療理論と実践を結びつける）
第13回　絵を用いた支援（ミルズ）
第14回　絵本やストーリーを用いた支援（ミルズ）
第15回　まとめ
第16回　レポート

［成績評価］
試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（30%）

［成績評価（備考）］
ディスカッションや事例検討への参加状況、自己評価など。
期末レポートでは、理論と実践の関連づけについて児童臨床心理を通して学んだことを各自の関心と結びつけて論じてください。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
授業中に事例についてグループディスカッションをします。事前に事例を読んで来てください。また、検討する事例の出典は下記の本です。授業中には一部しか紹介できません。特に『開かれた小さな扉』は読みやすく、とても優れた内容です。一冊を通して読むことをお勧めします。
本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）が必要です。合計15回の授業で60時間となります。

［試験・レポート等のフィードバック］
期末レポートはメールボックスを通して返却します（手渡しでの返却を希望する場合はレポートに明記してください）。レポートをメールで提出された場合、メールへの返信によりコメントします。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とします。特に、臨床心理士に必要な「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指します。

［テキスト］
授業中に資料を配付します。

［参考文献］
V. アクスライン（岡本訳, 1987）『開かれた小さな扉』日本エディタースクール出版部。
R. J. Crowley, J. C. Mills（1986）Therapeutic Metaphors for Children and the Child Within. Brunner/Mazel Publishers.
D.M. ドノヴァン、D. マッキンタイア（西澤哲訳, 2000）『トラウマをかかえた子どもたち』誠信書房。
その他の資料は、授業の流れと参加者の関心に応じて随時紹介します。

投映法特論

2単位：前期	1・2年
分島　芳子	

［科目補足情報］
ロールシャッハテストを学ぶ。

［到達目標］
投映法検査の中でロールシャッハテストを取り上げて、その基礎理論及び技法を理解し臨床場面で適切に施行し活用できる力をつける。量的分析・記号化法は片口法を用いる。その上で精神分析理論を基礎に継起分析を試み、投映法における人間理解の手法を身につける。心理的アセスメントに関する知識と技能を深める。

［履修の条件］
本大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻に正規に在籍している院生のみが履修できる。
学内実習施設での心理実践実習での心理アセスメント時に必要な知識・技能の一つとなり、支援計画の作成に必要となる。
授業第2回までに各自でテキストを購入し、授業には必ずテキストを持参すること。

［講義概要］
適切な施行、スコアリング、数量分析、継起分析、解釈について学ぶ。受講者相互に検査を実施し合い、各自データ解析しアセスメントリポートを作成する。様々な検査事例を通して臨床への適応を学ぶ。
心理に関する支援を要する者等に関する心理アセスメントの知識及び技能を投映法を用いることでさらに深めることを目標とする。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
　投映法の概要。ロールシャッハテストの特徴と基礎知識
第2回　施行法①
　検査状況の調整、教示、記録等
第3回　施行法②
　スコアリング
第4回　ロールシャッハテスト演習①
　受講者相互にテスト体験。記録作成
第5回　ロールシャッハテスト演習②
　受講者相互にテスト体験。記録作成
第6回　施行法③
　数量化
第7回　解釈法①
　数量分析による解釈

第8回　解釈法②
　　継起分析による解釈
第9回　解釈法③
　　精神医学的な診断との対応
第10回　解釈法④
　　総合解釈
第11回　報告の仕方
　　他のアセスメント情報との統合
　　小テスト
第12回　事例検討①
　　健康者など。人格特徴を把握する
第13回　事例検討②
　　神経症水準、境界例水準
第14回　事例検討③
　　精神病水準
第15回　事例検討④
　　芸術家の事例
第16回　レポート
　　テスト体験での自己検査データの解析と解釈

[成績評価]
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（50%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（0%）

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
毎回授業後に講義時の配布資料およびテキストを読み込み、知識を整理してほしい。本科目では各授業回に事後学習4時間が必要。合計15回の授業で合計60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
講義内小テストの解答・解説はテストが実施された翌週に行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目はディプロマポリシーに定める「高度な専門的な知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身に付けることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「クライエントへの臨床的支援能力」の習得を目指す。

[テキスト]
改訂　新・心理診断法ーロールシャッハ・テストの解説と研究
片口安史著　金子書房　9,550円+税　（各自購入の事）

[参考文献]
ロールシャッハ・テストの学習ー片口法スコアリング入門
藤岡信治・松岡正明著　金子書房　4,550円
改訂ロールシャッハ法と精神分析ー継起分析入門
馬場禮子著　岩崎学術出版　3,200円

サイコドラマ特論

2単位：前期	1・2年
谷井　淳一	

[到達目標]
①集団心理療法の1つであるサイコドラマを体験し、その目的を理解する。
②主役や補助自我および観客役割を経験することにより、自己理解や他者理解をすすめる機会とする。
③他者に対する共感性を高め、安心感のあるグループを形成し、癒しの体験を共有する。
④サイコドラマの監督として、サイコドラマを実施する方法を学び、集団に対してのセラピストの立ち位置を学ぶ。

[履修の条件]
サイコドラマは集団心理療法の一つで、セラピーの実際をグループで体験できる良さがある。臨床心理士を目指して学習する上で、1年生の前期にこの授業の中で主役や監督体験をすることは、個人治療としてのクライエント体験やセラピスト体験につながる大きな経験となる。是非1年生でこの授業を通じて、自己理解や他者理解を深めて欲しい。勿論2年生での履修も歓迎する。

[講義概要]
(1)サイコドラマの目的
サイコドラマは、即興的なドラマ表現を媒介として、個人に自己理解あるいは自己洞察をもたらすことを期待した心理療法である。臨床心理学を学ぶものとして、個人を対象にした技法とともに集団を対象としたスキルを身につけることも将来的に必要となる。そこで、集団心理療法の1つである「サイコドラマ」を体験的に学習する。
(2)サイコドラマの構成
サイコドラマは、集団のウォームアップ、個人のウォームアップ、主役の選択、ドラマ化、シェアリングという一連の流れをもっている。これらの流れを理解し体験的に学ぶ。
(3)サイコドラマの要素
サイコドラマは、主役、補助自我、観客などの要素からなり、主役の世界を立体的に表現していく。そのために、ダブルやロールリバーサル、ミラー、などの技法を駆使する。その技法について体験的に理解をはかる。
(4)将来、病院でのデイケアなどの仕事に就く場合、グループを対象とした活動を実施する場合がある。その方法の一つとして、サイコドラマは非常に役に立つ技法である。グループワークの一つとして、自分が癒される体験をするとともに、監督としてサイコドラマを実施するためのスキルを学ぶ。

■授業計画
第1回　サイコドラマの構成と5つの要素。ダブル、ミラー、役割交換の理解。サイコドラマのシナリオを読み合わせをする（ロールプレイ）。このことにより、サイコドラマの限界や注意点についても理解をはかる。
第2回　ウォーミングアップの実際。「忘れられない思い出」をテーマにしたドラマ体験
第3回　「もう一度行きたい場所」をテーマにした体験
第4回　「カードからメッセージをもらう」をテーマにしたドラマ体験
第5回　「今の気持ちをものになって表わす」のワークで浮かんできたテーマを用いたドラマ体験
第6回　「自分にプレゼントをする」のワークで浮かんできたテーマを用いたドラマ体験
第7回　「エンプティチェア」のワークで浮かんできたテーマを用いたドラマ体験
第8回　監督体験をするにあたっての理論的理解「ウォーミング

アップ、ドラマ化、シェアリングの役割」
第9回　主役選択の方法とファストインタビュー
第10回　ロールリバーサルの使い方
第11回　ファストシーンを創る
第12回　セカンドシーンを探す
第13回　総合的監督体験とレビュー1
第14回　総合的監督体験とレビュー2
第15回　総合的監督体験とレビュー3
第16回　まとめ

[成績評価]
試験(0%)、レポート(60%)、小テスト(0%)、課題提出(0%)、その他の評価方法(40%)

[成績評価(備考)]
授業への積極的参加を期待しています。色んな役割を自発的にとってください。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
以下の内容をレポートにしてもらうので、その日の役割やその日感じたことメモしておいてください。1回の授業につき4時間の復習時間が必要で、15回で合計60時間必要となる。

(1)各回ごとにどんな役割(主役・補助自我・観客)をして、何を感じたか。
(2)サイコドラマの体験が、自分の日常に影響を与えたか。
(3)自分の課題に気づいたことがあったか。何らかの課題解決に役立ったか。
(4)監督体験はどうであったか、何か感じたことがあったか。

以上のような観点で、主役体験・監督体験について A4用紙で2枚程度、合計4枚程度でレポートできるようにしておいて下さい

[試験・レポート等のフィードバック]
毎時間、シェアリングとレビューを行い、各授業のポイントを解説し、フィードバックを行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目はディプロマポリシーに定める「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に主役のテーマを的確に把握して適切なドラマを進行する方法を学習する。

[テキスト]
とくになし、必要があれば参考文献を参照してください。

[参考文献]
谷井淳一著「自己成長のためのサイコドラマ入門」(日本評論社)
高良聖著「サイコドラマの技法」(岩崎学術出版)
磯田雄二郎著「サイコドラマの理論と実践」(誠信書房)

心理療法スーパービジョン特論

2単位：前期	1・2年
福山　和女	

[到達目標]
心理療法の各論理に基づくスーパービジョンについてその方法と技術を習得する。

[履修の条件]
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
履修者の目標設定に基づく。参加型形式をとる。履修者が目標達成に積極的に取り組むことを要請する。
スーパービジョン体験が中心である。

[講義概要]
対人援助、特に心理療法に焦点を当て、スーパービジョンについて、理論と平行して実践的な研究を進めていく。臨床現場では、心理療法家はクライエントの的確な見立てが実践できるように、いくつかの方法論を適用し、治療構造の計画を立て、心理療法が実践できることを求められている。専門家にとっては、自己の分析、自己評価、自己覚知を通して訓練することが必須条件である。本講義では、レーニング・プロセスにスーパービジョンの概念と方法を適用し、心理療法家の養成プロセスを段階的に体験する学習方法を採用する。

■授業計画
第1回　スーパービジョンの歴史的変遷と日本におけるあゆみ
第2回　スーパービジョンの必要性と機能
第3回　組織、職位、職種からのスーパービジョンの貢献
第4回　心理療法の初心者に対するスーパービジョンの理論と方法
第5回　介入開始期での中堅援助者に対するスーパービジョンの理論と方法
第6回　問題の変革期への働きかけ－組織レベルでの対応－スタッフ関係に焦点を当てる。
第7回　心理支援の変革期におけるスーパーバイザー初心者の視点に焦点を当てる。
第8回　心理支援の安定期における中堅のスーパーバイザーの視点に焦点を当てる。
第9回　心理支援の終結期における中堅のスーパーバイザーの視点に焦点を当てる。
第10回　心理的社会的アプローチによるスーパービジョン
第11回　家族システムズ論によるスーパービジョン
第12回　集団支援におけるスーパービジョン
第13回　地域支援におけるスーパービジョン
第14回　家族・世代間スーパービジョン
第15回　スーパービジョンの実施上の留意点
第16回　まとめ－実践と理論との関連性

[成績評価]
試験(20%)、レポート(30%)、小テスト(20%)、課題提出(30%)、その他の評価方法(0%)

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
テキストや参考文献から、該当する理論や技術について予習・復習することを薦める。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

[試験・レポート等のフィードバック]
レポートなどで、習得した内容についての確認を行い、適宜に追加、補足を行う。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライエントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライエントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。1. 臨床心理の専門家としての使命、社会的責任を自覚、生涯にわたる研鑽の必要性を遵守し、心理支援を研究する姿勢を醸成する。

[テキスト]
福山和女編著（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房　2,800円+税

[参考文献]
中村伸一他『説き明かし・私の家族面接初回面接の実際』［DVD］2010　中島映像　46,000円

[備考]
出席日数、レポート提出など総合的評価である。
参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する

福祉分野に関する理論と支援の展開

2単位：前期	1・2年
加藤　純	

[到達目標]
福祉分野の理論と支援アプローチの成り立ちと主要概念について説明する力を養う。
福祉分野の理論と支援アプローチを自身の実践に結び付け省察・評価する力を養い、実践の改善課題について説明できるようになる。
福祉分野で支援を必要とするクライエントが直面する多様な課題を捉え、アセスメントし、支援計画を立てられるようになる。

[履修の条件]
公認心理師に必要な科目です。公認心理師の受験資格取得を目指す人は必ず履修してください。
2017年度以前の入学者は、単位取得できません。

[講義概要]
福祉分野で支援を必要とするクライエントが直面する多様な課題と、課題解決のために必要な心理およびソーシャルワークの理論と支援を学び、実践に活用できるようになることを目指します。講義と事例検討を中心に進めます。

■授業計画
第1回　福祉分野における課題の把握と理解：課題発生の機序に関する心理の視点と福祉の視点（演習・講義）
第2回　福祉分野における課題の把握と理解：問題の社会的構築（講義・演習）
第3回　福祉分野における法律の重要性：支援課題に関する法律による定義と分類（講義・演習）
第4回　福祉分野における法律の重要性：相談機関・福祉施設の措置と利用（講義）
第5回　福祉分野における公的機関による家族支援：児童相談所による支援を例に（演習）
第6回　家族システム論の基礎, 家族療法主要理論の系譜（講義）
第7回　福祉分野における家族療法事例の検討（演習）
第8回　福祉分野におけるアセスメントと支援計画：リスク理論（講義）
第9回　福祉分野におけるアセスメントと支援計画：リスク理論に基づくアセスメント様式の作成（演習）
第10回　福祉分野における生活支援の意義と方法（講義・演習）
第11回　社会福祉施設による家族支援（講義・演習）
第12回　福祉分野における地域資源の活用（講義・演習）
第13回　福祉分野における支援方法の評価と改善：プログラム評価とロジックモデル（講義・演習）
第14回　心理的アセスメントと社会福祉的アセスメントの統合：不登校・いじめを例に（講義・演習）
第15回　心理的支援と社会福祉的支援の統合：不登校・いじめを例に（講義）
第16回　-

[成績評価]
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（50%）

[成績評価（備考）]
授業には全て出席すること。最終レポートを提出し合格すること。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]
授業中に事例についてグループディスカッションをするので、事前に事例を読んできてください。また、参考文献を積極的に読んでください。本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）が必要です。合計15回の授業で60時間となります。

[試験・レポート等のフィードバック]
期末レポートはメールボックスを通して返却します（手渡しでの返却を希望する場合はレポートに明記してください）。
レポートをメールで提出された場合、メールへの返信によりコメントします。

[ディプロマポリシーとの関連性]
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とします。特に、公認心理師に必要な「クライエントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家

と連携する能力」の修得を目指します。

［テキスト］
授業中に資料を配布。

［参考文献］
授業では、下記の文献の内容を紹介します。
上野加代子・野村知二(2003)『〈児童虐待〉の構築』世界思想社教学社
中河伸俊他(2001)『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版
衣斐哲臣(1997)「体罰習慣がある家族に対する助言指導と保母・教師へのコンサルテーション」『家族療法研究』14巻2号
M. Durrant(1991)" Residential Treatment" W. W. Norton.
関連して、下記の文献もぜひお読みください。
Berg, I. K.(磯貝希久子監訳, 1997)『家族支援ハンドブック』金剛出版
A. Turnell, & S. Edwards(白木孝二他訳, 2004)『安全のサインを求めて』金剛出版

学校臨床心理学特論(教育分野に関する理論と支援の展開)

2単位：前期	1・2年
菊池　知美	

［到達目標］
スクールカウンセラーとして学校や地域・保護者などからなる子どもを育てるシステムを理解し, 自分の立ち位置を理解することを目的とする。

［履修の条件］
本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
学校臨床を目指す大学院生, および臨床心理士の基礎的な知識として学校臨床を学ぼうと志す大学院生。

［講義概要］
スクールカウンセラーという立場から見える学校のシステム・校務・地域連携・教職員の役割などについて確認していく。さらにスクールカウンセラーにはどのようなアプローチをとることが要求されているのかについて事例とディスカッションを通し学習する。事例は, 不登校・いじめ・家庭の問題・発達障害などについてである。

■授業計画
第1回　ガイダンス
　　学校臨床心理学とは
第2回　学校臨床心理学　理論①
　　講義とディスカッション
第3回　学校臨床心理学　理論②
　　講義とディスカッション
第4回　学校臨床事例研究①
第5回　学校臨床事例研究②
第6回　学校臨床事例研究③
第7回　学校臨床事例研究④
第8回　学校臨床事例研究⑤
第9回　学校臨床事例研究⑥
第10回　学校臨床事例研究⑦
第11回　学校臨床事例研究⑧
第12回　グループワーク
第13回　グループワーク
第14回　テスト
第15回　まとめ
第16回　なし

［成績評価］
試験(0%)、レポート(0%)、小テスト(60%)、課題提出(40%)、その他の評価方法(0%)

［成績評価(備考)］
各自担当した事例についてレジュメを作成してもらいます。レジュメ発表とディスカッション等への参与の程度, リアクションペーパーなどを総合的に評価します。

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
自分の担当以外の事例についても授業当日までに目を通し, 自分のコメントを用意して下さい。各授業ごとに4時間の準備学習(予習・復習等)を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
授業15回目のまとめで行う。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目はディプロマポリシーに定める「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

［テキスト］
ガイダンスにて紹介します。

［参考文献］
『学校現場に役立つ臨床心理学−事例から学ぶ』菅佐和子・木之下隆夫　日本評論社　2001

産業・労働分野に関する理論と支援の展開

2単位：前期	1・2年
渡邉　祐子	

［到達目標］
産業社会の激変やグローバル化の進展により雇用社会も大きく変化しています。加えて超少子高齢化時代となり、多様化が叫ばれる時代に個人の価値観も大きく変化しています。こうした背景をもとに、産業・労働分野に関する理論と支援についての知識と考え方を学び、働く人のストレスの増大からくる心の健康問題、人間関係の希薄さなどによる職場の状況と企業の課題について、講義と演習を交えて理解を深めます。
そのうえで、より良い職業人生を送るためのメンタルヘルス対策、キャリア開発、良好なコミュニケーションづくりについて学習するこ

とを目的とします。この目的を達成するために、集団・組織や職場・職業に関わる心理学の理論を学びながら、産業・労働分野についての知識と考え方をバランスよく身につけ、自己が専門とする支援の対象者との良好な関係性を構築できる知識や態度を学びます。

[履修の条件]

2017年度以前の入学者は、単位取得できません。
コミュニケーションは、組織が成立し、機能するための重要要件とされています。したがって、社会に貢献したり、良い仕事をしたりするために、特に、他者の支援をしようとする専門家にとって、ラポール構築のためのコミュニケーション・スキルは必須アイテムなのです。
コミュニケーション能力は、生まれもった能力や性格とまったく関係がないわけではありませんが、大きく反映されるものではありません。饒舌に話すことや、情報を伝達しあうだけのテクニカルなものではなく、それぞれの思いや意見の交換を通して、心を通じ合わせるプロセスといえます。
他者の話に興味・感心をもって他者理解することと、情報や気持を聴く一方で、自身の考えや思いを発信する自己表現のための双方向のコミュニケーション・スキルは、実践して身に付くものです。授業内でのグループ発表は、事前打ち合わせを含めた準備を通して、他者理解と自己表現を合わせもったコミュニケーション能力を養うことを理解しましょう。
毎授業の最後には、講義内容と演習について「振り返りシート」を記入し、提出してもらいます。この「振り返りシート」は成績評価になります。

[講義概要]

前半は、テキストを中心に、職場における問題（キャリア形成に関することを含む）に対して必要な心理に関する支援や、組織における人の行動に関することを10回にわたって講義します。
後半は、専門によって、また、履修の人数によって、3～4グループに分かれて、グループ演習と発表をします。専門に合わせて、産業・労働分野に関する理論、および、職場における問題に対して必要な心理に関する支援、組織における人の行動に関連づけたグループ演習を行い、グループで協力して授業内で発表します。発表後の全員のディスカッションを通して支援の心構えを養い、支援の展開を考えます。
また、3～4グループに分かれたときの専門と発表内容に合わせてゲストスピーカーをお呼びすることもあります。

■授業計画

第1回　ガイダンス、産業・組織心理学とは＜テキスト第1章＞
第2回　組織と個人、職場集団と人間関係＜第2・3章＞
第3回　ワーク・モチベーション＜第4章＞
第4回　組織とコミュニケーション＜第5章＞
第5回　リーダーシップ＜第6章＞
第6回　人事アセスメントと能力開発＜第7・8章＞
第7回　キャリア発達とその支援＜第9章＞
第8回　産業・組織におけるカウンセリング＜第10章＞
第9回　職業性ストレスとメンタルヘルス＜第12章＞
第10回　マーケティングリサーチ＜第14章＞とグループ演習と発表の編成とディスカッション
第11回　仕事の能率と安全＜第11章＞と、講義のまとめ
第12回　グループ演習と発表、ディスカッション（1）
第13回　グループ演習と発表、ディスカッション（2）
第14回　グループ演習と発表、ディスカッション（3）
第15回　グループ演習と発表、ディスカッション（4）と発表についてのまとめ
第16回　試験

[成績評価]

試験（30％）、レポート（20％）、小テスト（0％）、課題提出（0％）、その他の評価方法（50％）

[成績評価（備考）]

履修の人数によって、3～4グループに分かれて実施するグループ発表の評価（30％）と、毎授業に提出する「振り返りシート」による理解度を評価（20％）します。

[予習・復習の内容及びそれに必要な時間]

講義に対する予習は、テキストの該当する章を読んでおきましょう。復習は、講義配布資料やノートを整理しておきます。
また、グループ発表のグループ分けや役割が決まったら、授業外の時間を使って、打ち合せたり、発表練習をしましょう（打ち合せ回数は3回以上）。発表後は、ディスカッションの内容を振り返っておきましょう。
本科目では、各授業回に4時間の準備学習（予習。復習等）を必要とし、合計15回の授業で60時間となります。

[試験・レポート等のフィードバック]

毎授業のフィードバックは、次回の講義において行うことを基本としますが、ときには、数回まとめることもあります。また、レポートについては、翌々週には、フィードバックします。発表については、授業内に適宜口頭でコメントします。

[ディプロマポリシーとの関連性]

他者の思いや考えの理解と抱えている問題への共感、自己の思索の深化と思いの言語化、人間関係の構築、意見の交換、社会への考えの表明などを、状況に応じて適切に行うことができるようになることを研鑽することを心がけましょう。専門家としての資格を取得しようとする者は、専門家として、支援する対象者を尊重する姿勢を有し、倫理や法を理解し、遵守姿勢と遵守に必要な実践能力を有することを目指しましょう。

[テキスト]

講義では、テキストとして、次の書籍を中心に講義を行います。授業前には、必ず入手しておきましょう。テキストをベースにした流れがわかるレジメを配布します。
高橋浩・中嶋励子・渡邉祐子（著）・高橋修（編著）「社会人のための産業・組織心理学入門」（産業能率大学出版部）2,592円
ISBN−13：978−4382056961

[参考文献]

適宜、授業で紹介します。

[備考]

毎回、テキストを持参すること。

心の健康教育に関する理論と実践

2単位：後期	1・2年
田副　真美	

［到達目標］
1. 精神疾患および身体疾患、各発達段階に発現する心理的問題の理解
2. 具体的なアセスメント心理支援の理解
3. チーム医療の理解
4. 他職種共同の理解

［履修の条件］
本学大学院、臨床心理専攻に正規に在学する学生のみ履修できる。

［講義概要］
心理職が医療現場で働くために必要な健康・医療心理学の概要と心理支援について扱う。各授業ごとに到達目標を決め、その内容に沿って、学生が担当し発表する。

■授業計画
第1回　オリエンテーション
第2回　健康心理学とは
第3回　健康心理学の実際1：ストレスマネジメント
第4回　健康心理学の実際2：各種の心理支援法
第5回　医療心理学とは
第6回　医療心理学とはにおけるアセスメントと支援
第7回　医療心理学の実際1：精神科、小児精神科
第8回　医療心理学の実際2：総合病院における心理支援
第9回　医療心理学の実際3：心療内科
第10回　医療心理学の実際4：小児科
第11回　医療心理学の実際5：その他の領域（緩和医療、産業保健など）
第12回　医療心理学の実際6：地域保健活動の実際
第13回　災害心理学とは
第14回　他職種共同と医療連携
第15回　まとめ
第16回　試験

［成績評価］
試験（90%）、レポート（10%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（0%）

［成績評価（備考）］
授業への積極的な態度

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
本科目では各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
発表やレポートについて、授業内で適宜口頭でコメントする

［ディプロマポリシーとの関連性］
「全人的なヒューマン・ケアに必要な高度な専門性」に該当する。
この科目を履修することで、「人」または「人々」という存在に対する、個人、社会、環境というあらゆる視点からの「ケア」について、学際的視点から理解し、その「解明」と「援助」を総合的に考えることができる。

［テキスト］
必要な資料を適宜配布する

［参考文献］
岸太一、藤野秀美（編）「健康・医療心理学」ナカニシヤ出版

牧会カウンセリング特論

2単位：後期	1・2年
ジェームズ　サック	

［到達目標］
臨床の場においてケアを必要とするクライエントへの過程や原則を考察します。

［履修の条件］
M1生がやりやすいが、M2生でも履修出来ます。

［講義概要］
特に、スピリチュアリティ、スピリチュアル・ニーズ、スピリチュアル・ペインなどに対応するための専門的知識や技法を学ぶ。牧会カウンセリングの立場から精神的な査定を考慮する。様々な臨床の場での自分自身の経験を分かち合い、その時の個人的なニーズについて討議する。それによって他の人たちが必要するニーズについて洞察を受ける。苦しみや痛みの中に神様の存在は何なのか考える。スピリチュアリティと宗教の関係は何だろうか。

■授業計画
第1回　オリエンテーション：講義の進め方、授業に使用するテキストや参考文献の紹介
第2回　「生と死の選択」：ある病院のビデオを見てから、延命治療や倫理の事について意見を交換する
第3回　自分の臨床経験を考える：各院生が過去の経験を振り返てみる
第4回　牧会カウンセリング概念（I）：講義と体験学習を通して勉強する
第5回　牧会カウンセリング概念（II）：講義と体験学習を通して勉強する
第6回　Book Report：全員が一冊の本を読んで、授業で感想発表する
第7回　「夢」を考える：ユングの理論に基づいている勉強と体験学習をする
第8回　スピリチュアルな痛みの導入：スピリチュアル・ペインの概念を紹介する
第9回　スピリチュアルな痛み（I）：具体的に意味のペインを学ぶ
第10回　スピリチュアルな痛み（II）：具体的にゆるしのペインを学ぶ
第11回　スピリチュアルな痛み（III）：具体的に関係性のペインを学ぶ

第12回　スピリチュアルな痛み（IV）：具体的に絶望のペインを学ぶ
第13回　援助の技法の発表（I）：院生が一つのカウンセリングの技法を調べてからクラスに教える
第14回　援助の技法の発表（II）：院生が一つのカウンセリングの技法を調べてからクラスに教える
第15回　まとめ：学期の学ぶことをまとめる
第16回　発表のレポートを提出

［成績評価］
試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（0%）

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
牧会カウンセリング特論では各授業回に4時間の準備学習を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。配布された資料を読む。授業前にレポートや発表を準備しておく。

［試験・レポート等のフィードバック］
レポートに対するフィードバックを次回の授業内容において行なう。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

［テキスト］
特定のテキストは用いません。教室で資料を多数配布します。

［参考文献］
The American Book of Dying, Richard F. Groves
実践：スピリチュアルケア、リチャード・グローヴス、西野洋訳

臨床死生学特論

2単位：後期	1・2年
白井　幸子	

［到達目標］
人間の生と死について様々な側面を学ぶ。
特にホスピスや緩和ケア病棟など、末期医療の現場で働いている医療スタッフ、また、もし許されるなら、死に直面している患者さんとの出会いを通して、人間の生と死についての様々な課題について考える。
「より良い生」があるように「より良い死」があるとシュナイドマンは述べているが（1980）、本特論は「より良い生」と「より良い死」を探求すること、また、自分がどのように生き、どのような死を迎えたいのかを考えることを目的とする。

［履修の条件］
本大学大学院に在籍している1, 2年生のみ履修出来る。

［講義概要］
死生学は学際的な領域の課題を扱うが、本特論は臨床の現場で直面する課題、臨床心理学の領域に関係する死生学の課題に焦点を当てて学んでいく。末期医療の現場を訪問すること、文献を通して学ぶこと、課題に取り組み、グループで発表、討議などを通して講義を進めたい。
ホスピス病棟、緩和ケア病棟の訪問、新生会榛名荘老人ホームでの宿泊研修も予定している。日程に関しては実習先と受講生の日程を調整して決定する。

■授業計画
第1回　オリエンテーション：授業概略、自己紹介、本講義より望むもの、レポート担当課題の決定。人間の生と死について
第2回　人間の生と死：死生学とは（その1）
　　1）キリスト教の視点より
第3回　人間の生と死：死生学とは（その2）
　　2）仏教の視点より
第4回　人間の生と死：死生学とは（その3）
　　3）実存主義の視点より
第5回　人間の生と死：死生学とは（その4）
　　4）ギリシャ神話に見る生と死
第6回　良き生とは、良き死とは
第7回　人生の様々な問題：
　　1）出生前の問題（先天性の疾患など）
　　2）出生時の問題
第8回　心身の病について（その1）
第9回　心身の病について（その2）
第10回　終末期医療について：
　　緩和ケア病棟・ホスピス病棟について
第11回　高齢期における問題
　　高齢者が直面する問題とその対策
第12回　自殺と自殺予防について（その1）
　　1）人はなぜ自殺をするのか：日本における自殺の現状
第13回　自殺を予防するには（その2）
第14回　「私にとって生と死とは」（受講者のレポート発表と討議）
　　1）人生の価値の抽出（受講生のレポート発表と討議）（その1）
第15回　2）人生の価値の抽出（受講生のレポート発表と討議）（その2）
第16回　レポート、その他

［成績評価］
試験（0%）、レポート（25%）、小テスト（0%）、課題提出（25%）、その他の評価方法（50%）

［成績評価（備考）］
1）上記の課題から2つ選んで研究発表をする
2）グループ討議へ参加度
3）ホスピス病棟訪問、新生会榛名老人ホームでの研究会などへの参加

［予習・復習の内容及びそれに必要な時間］
1）上記の課題から2つ選びクラスで発表するのでその準備をすること。
2）テキスト・参考図書を熟読すること。

本科目では、各授業回に4時間の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計15回の授業で60時間となる。

［試験・レポート等のフィードバック］
フィードバックについてのディスカッションを次の授業でおこなう。

［ディプロマポリシーとの関連性］
この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

［テキスト］
シュナイドマン著　自殺とは何か. 誠信書房、1993, ¥2,650. +税
アルフォンス・デーケン著　死とどう向き合うか　NHK ライブラリー　1996、¥1、068+税

［参考文献］
河合隼雄（1989）生と死の接点　岩波書店　¥1700
神谷美恵子（2004）生きがいについて　みすず書房　¥1,600+税
シュナイドマン. E.S.（白井徳満・白井幸子訳）。死にゆく時そして残されるもの。誠信書房、1980.¥2,000
シュナイドマン. E.S.（白井徳満・白井幸子訳）。自殺者のこころ、そして生きのびる道。誠信書房、2001.¥2,310
袖井孝子編著. 死の人間学.　金子書房、2007, ¥3,150
森　幹郎. 老いと死を考える. 教文館、2007, ¥1,770.
デーケン、アルフォンス. 良く生き　よく笑い　よき死と出会う. 新潮社、2003, ¥1,470.
フランクル、V.E.（山田邦男・松田美佳訳）それでも人生にイエスと言う。春秋社、1993、¥1,780